

千葉大学ユニバーサルフェスティバル40回のあゆみ

The 40th Universal Festival: Chiba University Universal Festivals in Retrospection

見城 悌治
Teiji KENJO

要旨

千葉大学ユニバーサルフェスティバルは、1995年に千葉大学留学生センター（当時）が始めた留学生による文化紹介企画である。2011年12月の実施で40回の節目を迎えたのを機に、その成果と課題をまとめた。とりわけ、留学生と日本人学生が協働で発表内容を作り上げ、相互理解の場としている点、一般参加者が多く、地域の国際化に貢献している点などの特色を、筆者の分析と関係者の寄稿文から明らかにした。

はじめに

千葉大学ユニバーサルフェスティバルは、国際教育センターの前身である留学生センターが1995年に始めた留学生による文化紹介企画である。この企画の経緯や特色について、筆者は、「千葉大学ユニバーサルフェスティバル20回のあゆみ」として、『千葉大学留学生センター紀要』第8号（2002年3月）にまとめた。さらに、30回を行った後の2007年3月、『千葉大学Universal Festival 30回記念誌』を単独の冊子として作成した（国際教育センター編集・発行。千葉大学附属図書館および国際教育センター等で閲覧可能）。『30回記念誌』では、前者の内容も踏まえ、30回の歴史および成果と課題を詳述した。本稿では、千葉大学ユニバーサルフェスティバル（以下、UFと略）が、2011年12月の実施で40回の節目を迎えたのを機に、31回以降を中心に振り返り、改めてその成果と課題について考えようとするものである。

1 千葉大学ユニバーサルフェスティバルの概要

①趣旨など

千葉大学ユニバーサルフェスティバルは、千葉大学留学生センター指導相談部門（当時）が、1995年に開始した留学生の自国文化紹介企画である。センターが指導する学生グループである千葉大学国際学生会（CISG）に所属する学生たち（日本人学生が中心だが、留学生も参加している）が留学生をサポートし、協働作業を重ね、発表のステージを作り上げることに最大の特色がある。その過程において、留学生と日本人学生との交流、また相互理解を促進する成果があるとともに、観覧者は学内のみならず学外にも開放している

ため、地域における国際理解促進の重要な媒体にもなっている。

下記の一覧のように、初年度の1995年度には6回も実施していたが、翌年から3回実施となり、4年度目にあたる1998年度からは年2回の実施で定着している。

②運営形態

第30回までの運営形態は、基本的に「主催 千葉大学国際教育センター」、「協賛 千葉大学国際学生会（CISG）」、「後援 千葉市、千葉市教育委員会」で行っていた。また「協

千葉大学ユニバーサルフェスティバルの歴史

第1回（1995年6月15日） アメリカ	第23回（2003年7月11日） ミャンマー、モンゴル、ドイツ、ケニア、ブラジル
第2回（1995年7月13日） フィンランド	第24回（2004年1月9日） チリ、タイ、インドネシア、オーストラリア、アメリカ
第3回（1995年10月12日） マレーシア	第25回（2004年7月9日） ロシア、カンボジア、日本、メキシコ
第4回（1995年11月16日） ザイール（現コンゴ）	第26回（2004年12月10日） 韓国、ミャンマー
第5回（1995年12月14日） 台湾	第27回（2005年7月1日） 中国
第6回（1996年1月18日） 中国	第28回（2005年12月16日） オーストラリア、アメリカ、ホンジュラス、シリア、ラオス、マレーシア、ブラジル
第7回（1996年5月20日） 韓国	第29回（2006年6月21日） キルギス、ベトナム、ロシア、インドネシア
第8回（1996年10月24日） ネパール	第30回（2006年12月7日） ブラジル、コロンビア、モンゴル
第9回（1996年12月15日） インドネシア	第31回（2007年6月22日） 「アジアの大学生たちとその文化」 中国、韓国、タイ、インドネシア
第10回（1997年5月28日） オーストラリア	第32回（2007年12月21日） ガーナ、韓国、ネパール
第11回（1997年11月27日） パプア・ニューギニア	第33回（2008年6月20日） ベトナム、ブルガリア、ハンガリー、カナダ
第12回（1997年12月17日） フィリピン	第34回（2008年12月17日） スリランカ、エジプト、オーストラリア、スウェーデン
第13回（1998年7月9日） ロシア・サハ共和国	第35回（2009年6月25日） タイ、ドイツ、韓国
第14回（1998年10月21日） ベトナム	第36回（2009年12月17日） 韓国、アメリカ、インドネシア
第15回（1999年7月1日） ドイツ	第37回（2010年6月17日） タイ、ポーランド、ロシア
第16回（1999年12月2日） バングラデシュ	第38回（2010年12月16日） ネパール、ベトナム、 【特別企画】韓国の踊り披露、CISGによる留学生インタビュー映像
第17回（2000年7月13日） 「異文化との出会い～世界を感じて」 イタリア、イスラエル、ブルガリア、ヨルダン、ブラジル、トルコ、中国、アルゼンチン、フィリピン、ケニア、パプア・ニューギニア、バングラデシュ、タイ、韓国、インドネシア、日本	第39回（2011年6月15日） アメリカ、インドネシア、シリア、中国
第18回（2000年11月16日） タイ	第40回（2011年12月15日） 韓国、ドイツ、ベトナム、 【40回記念特別企画—世界の音楽】 アメリカ、ミャンマー、ブラジル、南アフリカ共和国
第19回（2001年6月15日） ペルー	
第20回（2001年12月14日） 「世界の響き～Music Box」 韓国、インドネシア、中国、ロシア・サハ共和国、日本	
第21回（2002年7月12日） トルコ、中国（ウイグル）、アメリカ、インドネシア、ドイツ	
第22回（2003年1月16日） インドネシア、アメリカ、ベトナム、台湾、ハンガリー、ロシア	

賛」団体として「財団法人 母と学生の会千葉支部」を掲げた回も少なくなかった。「母と学生の会」は、千葉大学の留学生支援を長きにわたり行っている団体で、交流会での料理作成手伝い、司会者の和服貸与および着付けなどを依頼した際は、いつも快く引き受けていただいている。しかし、「協賛」という形はやや重いという申し出もあり、近年は「協賛」団体と掲げることこそしていないが、様々な形でご協力いただいている点は従前と全く変わるところはない。

一方、第34回(2008年12月)からは、「CISG」の位置を「協賛」ではなく、「企画・運営」へと変え、実質的な主体であることを示すようになった(この変更にはもう一つの理由があったが、それについては後述)。さらに、第35回(2009年6月)からは、「千葉ユネスコ協会」に「協賛」団体になっていただくようになった(この点も後述)。よって、35回以降は、「主催 国際教育センター」、「企画・運営 CISG」、「協賛 千葉ユネスコ協会」、「後援 千葉市、千葉市教育委員会」の形式で実施している。

なお、31回UFまでは、冒頭の「あいさつ」はセンター長がしていたが、32回(2007年12月)からは、学長が行うようになった(学長が不都合な節は、教育担当理事が担当)。ある意味では、UFの評価や位置が、「センターの行事」から「大学の行事」へと昇格したとも言うだろう。

③作成過程

UFの実施実施は、学生たちの授業進捗(学年暦)の関係から、6月半ばと12月半ばに設定している。そのため、4月時と10月時にCISGが説明会を開き、まず発表希望者を募集、確定する作業に入る。この説明会や学生間の個人的繋がりによって充足できない場合は、教員が発表者探しの手助けをする事もある。そして、発表者が決まった後、CISGメンバーは、リーダー、司会、国別担当、広報、ポスター、パンフレット、装飾、音響照明、交流会、ユネスコなどの担当に分かれ、それぞれ準備を進める。本番と同じ大ホールを用いたリハーサルは基本的に3回としているが、会場の空き具合と準備状況によっては、4回実施することも少なくない。

発表形式は、近年パワーポイント(PPT)が主流となったが、PPTのみで終始することは少なく、楽器演奏や舞踏などのパフォーマンスを交えることが多い。発表のためのPPT作成や読み上げ原稿(原則的に発表言語は日本語としている)の日本語チェックに、CISGスタッフは大いに貢献している。さらに、諸パフォーマンスをCISGスタッフが一緒に行うこともあり、その場合は、何度もの練習を重ねた上で、本番に臨むことになる。

各国の発表内容は、発表する留学生の意向を原則的に重んじるが、観客の多数を占める日本人にとってあまりにも周知な事、あるいは全く



けやき会館 大ホール

興味を惹きそうもない事等の場合は、CISGが修正意見を出すこともある。そこには時に葛藤が生じるが、それを経ることで真の相互理解に至る場合も多い。ステージ発表が協働作業の成果とされる所以である。それらの具体的有様については、「巻末史料」として収録したところの留学生およびCISGメンバーの回想を参照されたい。

2 千葉大学ユニバーサルフェスティバル31回～40回の発表内容

「はじめに」で述べたが、1回から30回までについては、『千葉大学Universal Festival 30回記念誌』でまとめているため、ここでは31回からの10回分の概要のみを紹介することとする。

【第31回：2007年6月22日】

「アジアの大学生たちとその文化」 中国、韓国、タイ、インドネシア

（発表者：中国 普莉、王標、王氷菁、呉裕川。韓国 朴賢貞、朴景淑。インドネシア デワ・アユ・ウタミ・キナシー、ヌンキ・ウィディ・ヤニンシィー、チンテア・アングレニ。タイ タナーパー・カマスントーン、ウィッチュワン・サットソムブーン、パッタラーパン・ブンナーク）

UFはそれぞれが自由な発想で発表することを通例としており、統一したテーマの下でやることは少ない。しかし、この回は上記のテーマを掲げ、中国、タイ、インドネシアについては、千葉大学と協定を結んでいる大学から1年の短期留学をしている学生が、また韓国については、教員研修生（現職の学校教員が、半年間の日本語学習を経て、教育学部で研修を1年間行う）が、母国の大学や大学生の生活文化について説明を行った。そこでは、各国の受験競争の様子、キャンパスライフ、さらに卒業後の就職状況から国内での大卒者の社会的地位などまで、詳しい配布資料に映像を交え、多面的な紹介がされた。一口に「大学生活」といっても、国によって異なる点が少なくなく、まさに「異文化」への気づきを促す企画であった。なお、この回は、100名余収容のレセプションホールですべてを行ない、パフォーマンス系の発表は行わなかった。



【第32回：2007年12月21日 韓国、ガーナ、ネパール】

（発表者：韓国 朴キョンリョル、河ユビンほか。ガーナ エフィア・アンボンサ。ネパール ラジブ・シュレスタ）

31回を例外とし、会場はまた大ホールに戻った。まず、韓国は、留学生たちで結成したチーム「千打」が、華麗なサムルノリを披露してくれた。動きながらの打楽器演奏と踊り、また床に腰をおろしての太鼓の連打など、その力強さに心動かされるものがあった。

ガーナは、伝統宗教に基づく「成人式」の特色について、動画資料等を用いた説明をし

た。「成人式」を行うのは女性だけであること、式後は川に行き、それまでの自分をすべて洗い流すこと、などの習慣が今も息づいていることの紹介があった。

ネパールは、ブッダ生誕地などの説明のほか、生活文化を培い、聖なる意味を持ってきた「川」が、近年工場廃水などで環境悪化していること、それらの改善には日本の技術協力支援が必要なことも訴えた。



3ヶ国の報告者たち

【第33回：2008年6月20日 ベトナム、ブルガリア、ハンガリー、カナダ】

(発表者：ベトナム チン・ティ・タン・ズエン。ブルガリア ムラデノヴ・ドロテア。ハンガリー ゼレナーク・シャーンドル。カナダ マイケル・レパツキー)

ベトナムは、世界遺産、学校制度、テト（正月）などについて、映像を用いた説明を行った。発表者の身を包む綺麗なアオザイにも目を引き付けられるものがあった。

ブルガリアは、歴史文化の紹介が中心だったが、たとえば「音楽」に独特のリズムがあることを、会場の人々と手拍子を叩くことで理解できるような工夫があった。また千葉大学の「民族舞踏研究会」が賛助出演をし、伝統的なダンスを披露し、観客を魅了した。

ハンガリーは、ノーベル賞を受賞した科学者たちについて、またヨーロッパでは良く知られている温泉文化について等の紹介をした。さらに、「民族舞踏研究会」が再度登場し、ブルガリアとは異なった趣のダンスを実演した。

カナダは、「大学生の一日の生活」という設定で、朝から深夜までの生活を説明しつつ、適宜民族の多様性や経済の現状などを補足する形を取り入れるユニークな構成を取った。

交流会では各国の紙幣や絵葉書の展示のほか、ベトナムの揚げ春巻、ブルガリアのヨーグルトスープの試食があり、こちらも好評だった。



ブルガリアの民族舞踏

【第34回：2008年12月17日 スリランカ、エジプト、オーストラリア、スウェーデン】

(発表者：スリランカ チャミル・クマラ。エジプト マナル・スライマーン。オーストラリア ジャッキー・フー。スウェーデン エリン・エスネル)

スリランカはPPTを用いて、年中行事、食文化、さらに世界遺産などについて丁寧な説明を行った。さらに「あいさつ」の作法についても紹介があり、スリランカ全般を理解する良い機会になった。

エジプトは、日本人のエジプトイメージ、エジプト人の日本イメージとそれぞれの

ギャップを紹介し、また寸劇を用いながら、ジェスチャーの相違から文化を見つめ直した。

オーストラリアは、英語表現にある独特の言い回し、カンガルーなど野生動物との付き合い方、現代日本との結びつき等について、熱心な説明をしてくれた。

スウェーデンは、IKEAやH&Mなど日本でもなじみの企業の紹介などを導入とし、歴史を中心とした説明を行い、また発表者の母校リンショーピン大学についての紹介もあった。



交流会後の報告者とスタッフたち

交流会では、「母と学生の会」のご協力でお汁粉がふるまわれる中、発表者と一般参加者による歓談の輪が大きく広がっていた。

なお、34回は、CISGメンバーだけでなく、教養展開科目「国際交流実習」の受講生によって、企画運営が行われたが、この点については後述する。

【第35回：2009年6月25日 タイ、ドイツ、韓国】

（発表者：タイ ルーチャータム・ソーラット、サオワラック・サーイワーリー。ドイツ ネレ・シュベルト、スベア・ショネマイヤー。韓国 鄭園静、安ソラ）

2009年は、千葉大学創立60周年にあたったため、UFもその「記念事業」としての位置付けでおこなった。

この回は、「旅」という共通テーマを設け、発表者（留学生）が、日本人学生を各国の名所を案内する形を取った。双方がセリフを覚え、役割を演じ切る小劇スタイルで統一し、ユニークな企画になった。

現地を良く知る留学生が、通俗的なガイドブックとは異なる内容を、日本人学生との掛けあいの中で、絶妙な紹介をすることができた。

また、今回から千葉ユネスコ協会の「協賛」を得ることができ、ステージ発表後の交流会では、ユネスコ世界遺産のパネル展示等が併せて行われた。



けやき会館玄関に据えた装飾

【第36回：2009年12月17日 韓国、アメリカ、インドネシア】

（発表者：韓国 林ヨンジュ、メン ウンギュ。アメリカ リトル・レジーナ。インドネシア オキ・ディタ・アプリアント、プラディスタ・クリサンディニ他）

アメリカは、西部開拓などを含めた歴史や文化的な特色を説明した。また韓国は映像を交え、「箸」の使い方、「すみません」の表現など日韓の文化比較を行った。インドネシア

は竹製の楽器アングルンを用いた演奏を十数名の編成で披露した。

また交流会では、アメリカはお菓子の試食、韓国はゆず茶の試飲、インドネシアはアングルン演奏の実体験ができ、それぞれ参加者を楽しませていた。千葉ユネスコ協会によるパネル展示も前回に引き続きおこなわれ、各国のブースとも連動し、参加者の興味関心に応える形になった。



インドネシア アングルンの演奏

【第37回：2010年6月17日 タイ、ポーランド、ロシア】

(発表者：タイ スリベッチャン・カエシネ、ガノックヨードタガウィー・パッタラポー
ン。ポーランド ヴォルツィッシュ・アンナ。ロシア オースィキナ・アーニャ)

ロシアはモスクワ市民の日常生活の紹介を、アニメーションなどを駆使して説明するとともに、フォークソングを披露した。ポーランドは学内でインタビューをして「ポーランドのイメージ」を千葉大生に尋ねた映像を流すとともに、有名な昔話を紹介した。さらに、タイは4つの地方ごとに異なった踊りがあることを丁寧に説明した上、実際に日本人学生、他国留学生十数名でそれらの踊りを実際に披露した。



映像によるポーランド紹介

【第38回：2010年12月16日 ネパール、ベトナム、韓国、CISG】

(発表者：ネパール プララハド・ウプレティ、アヌパム・ポウデル。ベトナム チャン・ディン・チュエ他。韓国 鄭ホチョン)

ネパールは自然に恵まれた環境の紹介や宗教・祭りなどについて綺麗なスライドを用いた紹介を行った。また女子留学生がダンスを披露し、観客を魅了した。

ベトナムは、世界遺産、食文化、旧正月など多彩な内容を映像により紹介した。またベトナム学生と日本人学生十数名が仲良くバンブーダンスを披露した。



ベトナムのバンブーダンス



ネパールのダンス

なお、今回は発表が2ヶ国であったため、新しい試みとして、韓国学生が単独で、伝統的パフォーマンス（サンモ）を披露した。さらに、CISGが留学生に「日本イメージ」と「大学や地域社会に望むこと」をインタビューした映像を流すとともに、CISGの日常活動を紹介する時間を取った。

【第39回：2011年6月15日 アメリカ、インドネシア、シリア、中国】

（発表者：アメリカ 三村奈々。インドネシア リャン・アディ・ブトラ他。シリア ラガド・アディリー。中国 田蘊墨）

シリアは、首都ダマスカスの街並みなどPPTで紹介した後、日本人学生たちと練習を積み重ねたダンスを披露した。アメリカは、日本生まれでアメリカ育ちの学生（アメリカの大学から千葉大に交換留学）が、多文化と日々接する大学生活の様子と代表的な祭りである「感謝祭」についての紹介があった。中国は、カンフー、漢方薬などの伝統文化が自然との調和の中から生まれて来たこと、また漢字の成り立ちを説明しながら、日中友好を訴えた。インドネシアは、スライドを用いた多文化の紹介の後、インドネシアを代表する歌の熱唱、西スマトラのインダンダンスを9名が息ぴったりに演じた。

この4ヶ国が発表した後、特別企画として、「東日本大震災に対する留学生からのメッセージ」（CISG撮影編集）を上映した。かつて地震被害にあった地域からの留学生などから、それぞれが友情と優しさに満ちた言葉を伝えてくれた。



シリアのダンス



インドネシアのインダンダンス

【第40回：2011年12月15日 韓国、ドイツ、ベトナム、アメリカ、ミャンマー、ブラジル、南アフリカ共和国】

(発表者：韓国 韓セム、朴テウク、鄭ホチョンほか。ドイツ トビアス・ユング。ベトナム グエン・トゥック・ジウ・ハン他。アメリカ マラカイ・マイナー他。ブラジル ファビオ・ブラッツ。ミャンマー モ・トゥエ・ニィ。南アフリカ スィテビ・ムキゼ)

韓国は、サムルノリ、サンモなどの伝統的な音楽、踊りの実演、また韓服についての説明を行った。



韓国・サムルノリの演奏

ドイツは、PPTを用いて、クリスマス行事、街並み、古城などの紹介を行った。

ベトナムは伝統衣装・アオザイの歴史の説明に加え、4名による伝統的なダンスのほか、十数名によるファッションショーを行った。

また、40回記念企画として、「世界の音楽」のテーマの下、米国はラップ、ブラジルはボサノバ、南アフリカとミャンマーは伝統的なダンスを披露するなど、それぞれが個性あふれるパフォーマンスをしてくれた。



ベトナム・アオザイファッションショー

3 第31回U F 以降の展開における特記事項

1) CISGスタッフの一時的減少と緊急的対応

U Fは、センター教員の指導助言の下、CISGが留学生と協働した企画運営をし、発表のステージを作る形を基本にしてきた。ところが、2007年春段階において、上級生にこそCISGメンバーはいたものの、U Fを運営し得るに足る下級生の人員が実質的にゼロになる状態が現出した。CISGが動けないと、大がかりなステージを作ることは不可能である。そこで、教員から直接、短期留学生として協定校などからやってきた学生たちに、自分の在籍大学の特色を発表するよう依頼をし、それを「第31回U F」とすることにした。快諾してくれたのが中国、韓国、インドネシア、タイ留学生であったため、後知恵ながら、共通テーマを「アジアの大学生たちとその文化」とした。また発表内容についても、教員サイドから、①母校についての基本的概況、②母校と千葉大学（日本の大学）との比較、の

2 点に触れれば良いとし、学生側の負担を軽減するとともに、統一感を出すよう努めた。発表内容のチェック吟味もすべて教員が行った（通常はCISGがその作業を担当し、教員のチェックは最終段階のみにしている）。そして、各大学のデータ提供の充実を企図し、配布パンフレット内での割り当て頁を、通例は多くても 4 ページ程度に抑えていたのを、この回に限り 1 ヶ国 8 ページとした。

全体テーマがやや限定的になったため、会場も320名収容の大ホールではなく、収容定員100名余のレセプションホールで行ったが、やはり参加者は80名程度に留まった。

以上、第31回の形式は「苦肉の対応策」ではあったものの、試みとしては悪くなかったというのが、筆者の率直な感想である。一般的には派手なパフォーマンスが好まれる傾向にあることは否定できないが、大学主催行事である以上、「地味」と思われても、時にこのような企画があっても良いだろう。千葉大学協定校からの留学生が母校を紹介することは、日本人学生の海外留学への関心を高めることに、また一般参加者にとっても、発表者（留学生）の現実的なバックグラウンドを理解することに繋がると考えるからである。

さて、31回の開催を12月まで延ばす選択肢を排し、イレギュラーな形で6月開催を強行した成果物はもう一つあった。この回を観覧していた1年生が、UF運営に関わる意志を示してくれたことである。秋段階に至っても、CISG 1 年は彼と彼の友人の 2 名しかいなかったが、海外留学説明会に参加していた数名から協力を取り付けたこともあり、32回は通例のステージ発表形式に戻し、無事に実施し得たのである。実質的なメンバーが4名程度しかいなかったにも関わらず、大きなイベントを成功させたこの時のスタッフの労をここに特筆しておきたい。

2007年度初頭でCISGメンバーが急減した理由については定かでない。しかし、2008年度以降は、32回を観覧していた学生が新規参加し、さらに新入生を含めたメンバーが飛躍的に増加した結果、今日では、50名余りが所属する大所帯になった。急減、急増の背景は、人間関係の偶然的要素や微妙な機微にもよるだろうが、次世代に活動の意味を確実に伝承していく営為の必要性を改めて感じる。

（注記：本稿の巻末に、UFを発表した人、サポートした人、あるいは観覧した人たちから寄稿いただいた回想・感想を収録している。以下の叙述において、これらの感想・回想を適宜「史料」として引用していく。その際、「R 1」などの略号を用いるが、「R 1」は「留学生感想の 1 番目」であることを示す。同様に、「C」は「CISG スタッフ」、「D」は「大学関係者」、「K」は「協力者・一般参加者」を意味する。2007年度の困難であった時期の事情については、C 2、C 3、C 4を参照されたい。）

2) 「授業科目」としてのUFの実施

2007年度前期にCISGやUFの存続が危ぶまれる状態になった事情やボランティア実践などに授業単位を与えていこうとする動きを背景に、2008年度千葉大学教養科目中に「国際交流実習」という授業を新たに設け、第34回UF（2008年12月）に関わった学生に単位

を与える試みを行った。U FやCISGの活動に教育的意義があることは疑い得ないところであり、それを授業科目とすることで周知度を高めるとともに、こうした活動を担う人材の養成と裾野拡大を目指したのである。

授業登録者は35名で、CISGメンバーが17名、授業のみを取っていた者が18名だった。その中に4月のU F運営を経験したCISGメンバーが十数名いたが、前年度にも関わっていた者は数名に過ぎず、受講生全体から見れば、経験値にさほど大きな差はなかった。つまり、協業に大きな問題は生じず、34回U Fは、4ヶ国の学生が発表することで、無事に終了した（なお、細かい点だが、33回までは、CISGのU Fへの関わり方は「協賛」という形にしていた。しかし、34回を「授業」と位置付けた時、その受講生も前面に出す必要を感じ、『国際交流実習』受講生」および「CISG」の役割を、「U Fの企画・運営」者としたのである。その後のU Fでも、CISGは「企画・運営」としている）。

さて、この授業で課した最終レポートの中には、「授業でなければ、こうした活動に関わることが出来なかったのも、とても良かった」、「ひとつのステージを今まで関わってこなかった人たちと作るのは難しいことだが、良い経験になった。無事終了後は、思わず感動してしまった。交流会では地域の人とも会話することができ、ふだん教室とアパートを往復する変わらない日常に刺激を与えてくれた。自分が積極的に活動すれば、交友範囲は無限に広がり、大学生活の充実は自分次第だということを改めて実感させてくれた」など、前向きな内容が多かった。その感想などから、授業科目として行なった意味は十分にあったとの自己評価を下している。

しかしながら、やはり問題も残った。たとえば、授業時間枠を定時とすることが難しいため、「集中講義」としたものの、発表当日やりハーサル出席の縛りはもちろん、準備過程に割くべき時間も多く、トータルの拘束時間が90分×15回を越えた学生も少なくなかったと思われる。また、成績評価については、①「活動日誌」（雛型をこちらで用意し、最初の打ち合わせ段階から、発表当日までの過程を逐次メモさせた）および②「最終レポート」（「U Fに関わって楽しかったこと、学んだこと」、「反省点・問題点」、「改善のアイデア」を書かせた）を提出させ、それらから総合的に判断した。しかし、たとえば「活動日誌」の内容については、教員が直接見聞き得ない部分が少なくないなど、成績算定には苦勞するところもあった。

受講生から大きな不満や批判が出た訳ではなかったが、これらの理由もあり、その後は「授業科目」としての位置付けをしていない。とは言え、学生に単位を与える形式に様々な試みが求められている現在、「授業」としての「国際交流実習」の在り方については、継続的に検討していきたい。

3) 千葉ユネスコ協会との連動企画開始

「2 千葉大学U Fの発表内容」でも記したが、2009年6月の第35回U Fから、千葉ユネスコ協会に「協賛」団体となっていただいた（そこに至る経緯については、中田陽一氏



ユネスコ世界遺産の展示



房総太巻き祭り寿司

の証言、本稿末尾のK 1 を参照されたい)。そして、35回以降、現在（40回）まで、ステージ発表終了後の交流会会場であるレセプションホールの一隅で、発表国にかかわる「ユネスコ世界遺産」パネルの展示、関連DVDの鑑賞、またユネスコの寺子屋活動等の紹介をしていただいている。さらに協会のご手配で毎回用意いただいている千葉の伝統郷土料理「房総太巻き祭り寿司」は、空腹を埋めるだけでなく、千葉の伝統文化を留学生たちに紹介する役目も担っている。

CISGも「ユネスコ担当」を決め、協会側と事前に連絡を取り合うとともに、当日の設営等に関わっている。またユネスコの活動に共鳴して会員となり、毎回ブースを手伝う留学生が出る（R 1）など、ユネスコ協会に関わっていただいたことが、「交流」を新たな方向へ多面的に広げるきっかけになっている事は特筆されよう。

4) 近年の発表国・発表者の特徴

31回から40回までの10回に登場した留学生の国別を累計で示すと、韓国6回、ベトナム・タイ・インドネシア・アメリカ3回、ネパール・ドイツ2回、中国・ミャンマー・スリランカ・シリア・エジプト・ブルガリア・ハンガリー・スウェーデン・ポーランド・ロシア・カナダ・オーストラリア・ブラジル・ガーナ・南アフリカ共和国・日本（CISG）各1回で、23ヶ国が登場している。

ちなみに、1～30回までは、38の国・地域が発表しているが、登場回数第1位は、インドネシアの7回、以下、5回が中国・アメリカ・ロシア、4回が韓国・ブラジル、3回がベトナム・タイ・ドイツ・日本、2回が台湾、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、モンゴル、バングラデシュ、トルコ、オーストラリア、パプアニューギニア、ケニア、1回がネパール、ラオス、カンボジア、キルギス、ヨルダン、シリア、イスラエル、フィンランド、イタリア、オーストリア、ハンガリー、ブルガリア、メキシコ、コロンビア、ホンジュラス、ペルー、アルゼンチン、チリ、ザイール（現コンゴ）である。

さて、直近5年の特色は、留学生の9割を占めるアジア地域のみでなく、欧米、アフリカなどがバランスよく登場していることである。そして、アジアの中では、韓国の活躍が目だつ。また、各回発表の留学生（代表者）39名の身分を短期留学生と正規の学部生・大

学院生に分けてみると、前者が25名(65%)、後者が14名(35%)となる。短期生の発表が多い印象を持っていたが、正規生も頑張っているのである(特に、複数回登場しているベトナム、ネパールはすべて正規生、韓国も3回は正規生が中心になっている)。

40回を振り返り、韓国とインドネシアの発表が多いのは、一つには留学生会等のネットワークがしっかりしていることがある。また、近年韓国が多いのは、CISGに韓国留学生が加入していることも大きい。さらに本文中にも記したが、韓国は留学生有志が結成している「千打(チダ)」が日々練習を重ねている伝統楽器演奏を、32回、40回で披露している。またインドネシアも、留学生有志が参加している「千葉インドネシアソサエティ」との連携に基づく伝統楽器演奏を36回に行った。このように日ごろからの積み重ねをもつグループに発表してもらうことも、UFの一つの役割になるだろう。

一方、キャンパスに同国の仲間が多くいる場合は、協力を得やすいが、仲間が一人あるいは数名しかいない学生も多い。そうした人から発表希望があった場合にも、CISG等のサポートにより、発表できる体制が整っていることは明記しておきたい。

4 千葉大学ユニバーサルフェスティバルの成果と課題

1) 成果

2007年3月にまとめた『千葉大学Universal Festival 30回記念誌』において、筆者はUFの成果について、a) 留学生と日本人学生の協働作業、b) 留学生の生の声を伝える「場」の提供、c) 地域社会の国際理解への貢献の3つを挙げた。31回以降の5年間でも、この3点は引き続き、評価に値する意義を持ち続けている。

a) については、本稿でも多少触れたが、発表のやり方や内容をめぐり、留学生と日本人学生が真剣な意見(本音)をぶつけ合い、折り合う中で、妥協点を探る緊迫した場面も含む。34回UFについては、最終レポートを課したため、何名かがそうした葛藤を書き残している。たとえば、「世界に誇るに足る母国の古い歴史や文化について報告したい」と主張した留学生に対し、「それは日本でも周知の事項なので、それは止めて、日常文化について話して欲しい」と日本人が要請。しかし、留学生は「そんな当たり前の事を紹介しても意味がない」と対応した云々。発表者として手を挙げる留学生の多くは、母国の誇らしさを日本でアピールしたいとの意識を強く持つ場合が多い。最善の「落とし所」は存在しないかもしれないが、それらの遣り取りが留学生と日本人学生の「異文化理解」の幅を広げるものであることは間違いないだろう。両者の協働作業の意義については、史料のR3、R12、C1、C2、C4、C6、C7他も参考になる。

b) 「留学生の生の声を伝える」ことは、「〇〇人は△△」というステレオタイプのイメージを打破することにも繋がる。R7は、そうした意識に基づいて、日常生活を中心に発表したと回顧している。近年は、各地に留学生のみならず、外国人観光客や労働者が増加しているとは言え、身近に接する機会がない一般学生や市民は、おのずから手前勝手な憧憬や畏怖感情を一方的に膨らませる傾向もあるだろう。そうした中、たった一人であっ

ても「〇〇人」の「生の声」を聞き、また交流会で直接質問を交わす機会は大きな意味を持つと考える。

さらに、2011年6月に実施した39回UFで、CISGスタッフが「東日本大震災に対する留学生からのメッセージ」として、留学生にインタビューした映像を会場で披露した事例も特記しておきたい。留学生たちが、この未曾有の災害に対し、きわめて誠実な態度で、励ましの言葉を慎重かつ温かく紡いでいる映像は、国際教育センターHPにアップされた後、文部科学省HPにも接続され、多くの人の目に触れる方向へ発展していった。

c)「地域社会の国際理解への貢献」

UFの観覧者に地域の方々が多いことは、31回以降も変わりなく、毎回会場の少なくとも5割程度は学外の方々によって占められている。「千葉ユネスコ協会」とのジョイントを第35回から始めたことは既述した（K1、2）。「母と学生の会」の方々に、料理作成補助や和服の貸与着付けをしていただいていることも述べた（K3）。さらに、日常的に千葉大学留学生を支援くださっている三井ボランティアネットワーク事業団千葉大部会の方々（K4、5）、千葉大学けやき倶楽部国際理解グループの方々（K6～8）も毎回観覧されている。これらのご感想・ご提言は、本稿末に収録している。

袖ヶ浦市国際交流協会には、年2回、留学生のホームステイ受入れをしていただいているが、そのご縁から、複数の方が、毎回UFを観覧くださっている。そのみか、文化紹介をした留学生たちを市に招き、同種のパフォーマンスを披露してもらう、という発展的な交流を行っている。UFが、留学生と地域の方々とを結ぶ接点になっている好事例であろう。さらに、UFやホームステイなどの交流の結果、海外での結婚式に招かれるまでの関係性を築いていることは大学当局としては頭を下げるほかない（K9～11）。

この項の最後になるが、UFは親子連れ（D2）や高校生の参加も少なくないことを明記しておきたい。生徒たちの国際的視野を拡げることがを目的に、教諭が引率して参加する学校もある（K12、13）。参加者全体からすると少数ではあるが、未来を担う子どもたち、また高校生たちがこのイベントに参加してくれることは嬉しいことである。

以上の3点は30回時に掲げていたものではあるが、これらを改めて「成果」として強調したい。また今回はそれに加え、以下2点ほどを加えたい。



地域の人々、学生たちの参加でにぎわうUFの交流会

d) 派遣留学への動機づけとしての役割

国際教育センターは、留学生への教育、交流支援などだけでなく、海外留学を希望する学生の助言・指導も業務としている。千葉大学では海外の協定校に交換留学生として赴く場合、現地で1年間学び、そこで取得した単位を千葉大学の要卒単位に読み替えてもらい、4年間で卒業できる仕組みを構築している。UF30回を行った2006年段階では、留学を希望する日本人学生は相対的に少なく、またCISGメンバーもあまりチャレンジをすることはなかった。しかし、ここ2、3年CISGメンバーで交換留学生として派遣される学生が増えている(C6、9)。

4、5年前になるが、「CISGの仲間である留学生の〇〇君から、大学生のうちに絶対留学した方がよい!と強く言われ、だんだん留学したいと思うようになってきた」と述べ、大学院生に至って、念願の留学を果たした学生がいた(既に卒業し、社会人になっている)。UFやCISGがこうした動機づけの場になっていることは、大きな成果と言えるだろう。

e) 映像を用いた新しい発表形式

PC技術の発達により、学生たちがネット等から取った静止画、動画を編集すること、また独自の動画を撮影編集し上映することが、きわめて簡便になってきた。30回までも、独自映像を用いた発表は若干あったが、直近の10回では効果的に用いられる数が増えてきた。36回の韓国と日本の文化的行動の違いの実演、37回のポーランド学生による学内インタビュー、38回CISGによる留学生インタビュー、39回大震災に対するメッセージなどである。

UFはステージで生身の学生たちが発表するのが基本であるが、ステージ上では表現できない内容をビデオ映像で補うことは、やはり有効な場合も多い。また日本語力が不十分な留学生であっても、映像出演あれば、字幕スーパーを付けることで、自分の想いをストレートに表現できる。安易な濫用は禁物だが、これらが様々な発表の可能性を秘めていることは間違いない。

2) 今後の課題

『30回記念誌』時における「課題」は、a) 入念な準備作業の必要性、b) 学生の負担の軽減・分散化、c) 地域ボランティアとの連携の模索、の3点であった。

a)、b) については、永遠の課題と言えるが、ここ2～3年は、CISGメンバーが50～60名にまで増えているため、b) については、仕事の明確な分担さえすれば、ある程度の解決はつくだろう。ただ人数が増えれば、全体の動きや流れが掴みにくくなる弊は生じる。定期ミーティングやメーリングリストを通じて流れる情報を漏らさず把握する姿勢が大切になってくる。またリーダーとなった学生は、少人数の時代に比べ、全体統括、調整に意を払う重責が増すことになるが、その経験を今後に活かすような積極性が求められるだろう(リーダー経験者の「感想」は、C2、C7～10を参照)。

c) については、少なくとも、千葉ユネスコ協会との連携が具体的な形になった。母の会による助力は従前からある。しかし、他のボランティア団体などとの連携は、「観客」として参加いただく以外にどのような形があるのか、また望ましいのかについて、継続的に考えていきたい。

また近隣の高校からの参加者なども併せ考えると、「地域ボランティア」以外との「地域との連携」の在り方を模索することも課題になるだろう。

以上の3つに加え、『30回記念誌』では項目立てこそしなかったものの、30回時にも存在した「課題」を2つあげておく。

d) 新しい発表形式の模索

UFの発表形式は、PPTや動画などの映像を用いた紹介と楽器演奏や踊りなどのパフォーマンスの2本立てで行われることが多い。近年はPC技術の発展で、プロ顔負けのプレゼンテーションをする学生もおり、こうした技術革新に新しい可能性を期待することは「成果」の項で述べた通りである。

こうした入念な構想と準備の下で発表することは、当然あるいは望ましいことであるが、反面、筆者が『30回記念誌』で書いた次のような懸念は残る。「観客の眼が肥え、期待度も高くなるにつれ、手際が悪く見える回は、ステージを作る学生の熱心度、また時間をかける度合いはそれほど変わらないのに、常連客の満足度が比例しないことも起こりうる。少々厄介な問題と言えよう（35頁）」。

今回、長きにわたる観覧経験を持つ学内外の方が寄せてくださった文章の中には、「PPTの説明のみだと、興味を惹かない」という趣旨の率直なご意見も含まれている。一方で、「近年、学生のパフォーマンスがますます向上し、素晴らしい！」という感想も多い。筆者も、発表者がパフォーマンスを披露することを期待する向きは否定しない。しかし、その意識が全体を支配すると、「技」や「芸」を持たない学生は、発表する機会を持てなくなる。要は、全体としてバランスよい発表内容を用意する、ということに尽きるのであろうが、難しい問題をはらむのは事実である。

第31回は、留学生の母校をPPTのみで紹介するという試みを行った。たぶん実験的であったこの企画は参加者こそ少なかったものの、概して好評であった。こうした形式を再度行っても良いだろうし、パネルディスカッションが設定できるなら挑んで良いだろう。学内サークルとのコラボレーションについては、かつて「日本」紹介のため、柔道部、邦楽部に日ごろの成果を披露してもらったことがある。また、東欧諸国が発表した際に、民族舞踏研究会が賛助出演したことは、本稿で触れたとおりである。夕方18時から20時までの実施、という枠を取り払い、教職員、学生を巻き込んだ大掛かりなイベントにしてはどうかという提言もある（D1）。

UFは、今日では200名程度の人が必要参集する「恒例行事」になった。しかも、その「場」をどのように創っていくかは、自由である。これまでの「伝統」の良い部分は確実に引き継ぎつつ、新しい発表スタイルに、若い発想で挑戦していつてくれることを大いに

期待している。

e) 千葉大生の参加増加

感想のD1、D3に見えるように、地域の方々に比し、千葉大生の観覧が相対的に少ない傾向は一貫して続いている。それを克服する一案として、34回は「授業」に指定したことは既述した通りである。また、近年は、学生、教職員向けの一斉メールで、UFの実施宣伝をするなどの広報にも意を注いでいる。UFの担い手であるCISG学生も2007年の危機的状况を脱した後、急激な人数増加を果たしていることなどから、こうした活動やイベントへの関心は高まっていると考えている。海外留学希望者へのUF参加奨励を含め、粘り強い宣伝広報活動を継続していく必要があるだろう。

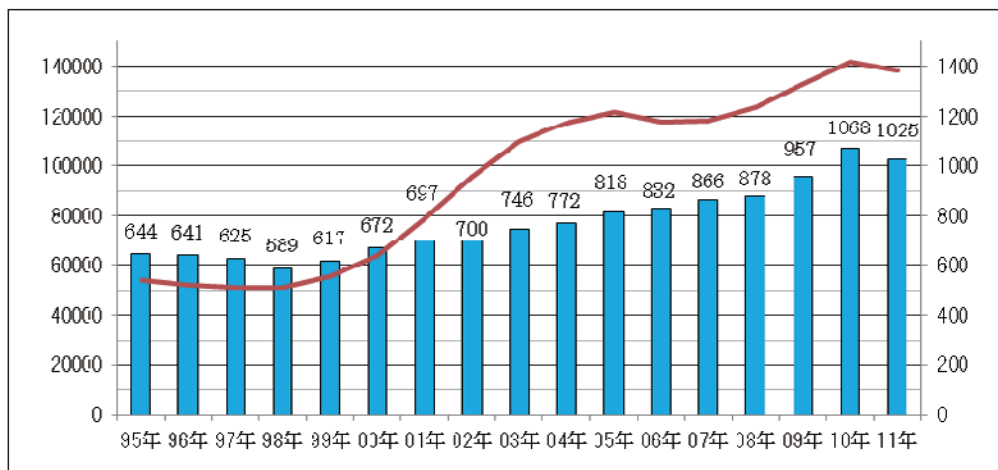
f) 国際的人道支援等との連携

第33回UF（2008年6月20日）では、ミャンマーのサイクロン被害と中国・四川省大地震への募金活動を行っている。参加者から総計21,581円の義援金を得ることができ、それを等分に分け、日本赤十字社を通じ、被災地復興に寄付を行った。

このような自然災害が増える傾向にあるのは、日々感じるところである。事あるごとに対応するか否かには議論が必要だが、UF開催時に（通常で言えば、CISGの活動において）、仲間である留学生の母国が危機に陥っていた時、どのような対処支援ができるのか。地域ボランティア団体の中には、バザー開催などのノウハウを持っているところもある。それらとの連携を含め、弾力的積極的な対処ができるような構えを常に持つておくことも必要であろう。

おわりに

ここに示したグラフは、UFが始まった1995年から2011年までの全国の留学生数（折れ線）と千葉大学留学生数（棒線）の変遷を示したものである。1995年段階で、千葉大留学生は644名、全国は53,847名であったのが、2011年は（東日本大震災の影響で、前年より微減したものの）、千葉大留学生は1,025名、全国は138,075名であった。千葉大において



は、1.6倍、全国では2.6倍も留学生数が増加している。

この17年の間、UFを継続実施してこられたのは、発表を快諾してくれた留学生たち、またそれをサポートし協働してステージを創り上げたCISGメンバーたち、さらには陰に日向に支えてくれた地域ボランティアの方々のお陰である。改めて感謝を申し上げる。

今後も手を挙げる留学生と支えるCISGがいる限り、UFを継続していくつもりであるが、その方向に、様々な可能性があることは、本論で述べた通りである。学内におけるUFの存在意義や役割をさらに高めていくとともに、地域に貢献する貴重な場としての役割も一層促進していくことを、諸方面の力を借りつつ、実現していきたいと考えている。

《巻末史料 UFに関わった人たちの感想、意見、提言》

UFでかつて発表した留学生(元・現)(12名)、CISG(元・現)スタッフ(10名)、大学関係者(3名)、地域の協力者・一般参加者(13名)に対し、UFをめぐる感想・提言の寄稿を依頼したところ、38名から文章が寄せられたので、以下に収録、紹介する。

なお、以下の各文章中で、各執筆者が原稿で用いた「千葉大学ユニバーサルフェスティバル」を意味する語については、すべて「UF」の略称で統一した。

【留学生(元・現)たち】

[R1 シュレスタ・ラジブ(ネパール) 第32回発表]

「ユニバーサルフェスティバルは地域住民との絆を結ぶ場」

私は2007年12月の第32回UFで、母国ネパールについて発表をさせていただきました。そこで母国についての真の情報を伝えることができたことはもちろんのこと、多くの地域住民(日本人)とより一層強い絆を結ぶことが出来ました。

32回のUFも他のUF同様、千葉大学学長がご出席される公式の場でした。地域の国際交流団体、そして国際理解に関心を持つ個々人の方々も参加されていました。皆さんは留学生をより理解してくれる方々です。また、留学生と仲良くしたいという日本人大学生も協力してくれました。そういう場で母国ネパールのシンボルであるお釈迦様の生誕地「ルンビニ」及び世界最高峰「エベレスト」についての真の情報を提供することが出来たのは、何より嬉しかったです。日本をはじめ世界において、お釈迦様の生誕地はインドだと、そしてエベレストは中国のものだと伝わっているようで、来場の皆様もほとんど同様に理解していたようでした。その間違った情報を払拭出来たのはとても良かったです。本国の人から真の情報を伝えることに、大きな意味があると思います。

上記の国際交流団体とは多少発表以前から交流をしておりましたが、発表後の交流会でさらに親近感をもってお話しをすることが出来ました。それによってより一層団体のメンバーと絆を結ぶことができたと思います。それから頻繁にそれぞれの団体のイベントに参加したりしてお互いの関係をより深めてまいりました。特に千葉ユネスコ協会の会員となり、そのイベントを手伝わせてもらっています。もちろん年に2回開催されるUFもそうです。

一方で、日本人大学生との関係も深まりました。UFの後は大学祭にネパールの料理店を展開したときに多くの大学生よりご協力をいただきました。また、大学内で会ったときにはお互いに挨拶できて、心温まるひと時を味わっております。

このようにUFは留学生にとって大きな意義をもつイベントです。母国の真の情報を伝える絶好の場ですし、特に新入生にとって日本人の友達を作れる機会でもあります。さらに国際交流団体など地域住民と接触できる場でもあり、それぞれが催す日本文化紹介に参加できるきっかけにもなります。

(現 千葉大学大学院人文社会科学研究所 博士課程3年)

〔R 2 チャミリ・クマラ（スリランカ） 第34回発表〕

私が、2008年12月の第34回UFに参加して良かったことは3つあります。1つは、母国スリランカについて伝えられる機会を与えてもらったことです。私は、いろいろな人がスリランカのことを知ってもらえたら嬉しいと思っています。普段の生活では、詳しく話す機会がありません。きっと、日本人ではまだ行ったことがない人が多いと思います。そこで発表では、どこにある国なのか、どんな言葉を話しているのか、他にも文化や教育、食事や衣服についてなど話しました。

2つ目は、スリランカについて親しい人だけでなく、たくさんの人に聞いてもらえたことです。友だちにはスリランカについて話すことができます。だけど、大勢の人の前で話をする場は、普段の生活ではありません。発表の後にはセイロンティーを振る舞って、いろいろと興味を持って聞きに来てくれる人もいて、とても楽しかったです。

3つ目は、私の発表を聞いて、「いつか行ってみたいな」と思って、将来、スリランカに来てくれるかもしれないことです。スリランカは内戦が終わったばかりで、やっと平和がおとずれました。日本からみたら発展途上国にみえるかもしれませんが、でも、人は優しいし、有名なお祭りや、世界遺産、紅茶やカレー、きれいな海など、たくさん素晴らしいところがあります。私の発表を聞いて、スリランカにいい印象をもって、いつか訪れてくれたら幸せです。

研究をやりながら、発表の準備をしたので大変なこともありましたが、UFに参加して本当に良かったです。

（現 千葉大学大学院融合科学研究科 博士課程3年）

〔R 3 ジャッキー・フー（オーストラリア） 第34回発表〕

4年前の2008年12月17日に、僕は千葉大のUFで発表した。あの頃のことを思い出して懐かしくてたまらない。内容は、オーストラリアに関する歴史と文化などを紹介することだった。あの日、観客たちがいっぱい来てくれて、けやき会館の舞台上で発表するときの緊張感はいまでも忘れない。無事に完成して本当にほっとした。

発表の準備は1ヶ月前から始まり、原稿を書き、パワーポイントを作り、打ち合わせなどのミーティングを幾度か経験し、2回のリハーサルまでをした。この間に、発表について日本人の学生と色々な問題に直面して討論してから解決した。そしてチームワークの重要性を分かった上で、日本人学生と協力し合って発表の準備を進めたので、日本人に対する理解も深くなったような気がする。

正直に言えば、始まる前にいろいろ心配した。やはり文化が違うので、意見が異なる時どうしようとか、僕の中途半端の日本語で言いたいことがちゃんと伝わるかどうか、などを悩んでいた。しかし、始めたら、思ったよりずっと順調に進んだ。日本人学生は発表の細部と時間の利用など具体的な問題についてまじめに考え、僕の日本語の表現から文法の間違いまで丁寧に説明してくれてありがたい気持ちでいっぱいだった。仕事は多かった

が、すべての事が有効的に進み、楽しくて充実な毎日だった。

あの活動を通じて、新しい友達がたくさんできて、日本に親しみをすごく感じた。お互いに協力し合って同じ目標に向かって一緒に頑張り本当に楽しかった。また、僕にとって日本語で発表するなんて初めての経験だから、すごく勉強になった。日本人の学生に手伝ってもらったが、発表の内容をまとめてパワーポイントを使い、一人で日本語での発表するなんて難しいタスクだった。大変といえば大変かもしれないが、この大変さを自ら体験して、最後まで頑張っていていい結果を出せ、この上ない満足感だった。麻雀好きの僕にとって、国士無双があがったほど気持ちがよかった(笑)。千葉大のUFに参加させてくれてありがとう！

僕は日本からオーストラリアに戻った後、大学院に進学して翻訳を専攻した。今通訳として働いている。いつかチャンスがあったら、もう一度千葉大に戻ってUFを見に行きたい。

〔R4 林妍姝(イム・ヨンジュ)(韓国) 第36回発表〕

UFが40回を迎えたというご連絡を受け、嬉しい気持ちです。おめでとうございます。留学したばかりだった2009年の秋にUFの説明会を聞いて、参加するかどうか少し迷いました。そのときはまだ日本の生活に慣れていなかったのも、自分がしっかりしないと回りに迷惑をかけてしまうと思ったためです。しかし、協力してくださったCISGのみなさんのおかげで無事に発表までたどり着けるようになりました。

私が発表した主題は「日本と韓国の文化の違い」でした。どのような内容で発表するかを韓国班の土屋響子さん、羽田司くんと話し合い、そこで韓国に生まれ育った自分には不思議ではなかった事や日本の文化について知るようになりました。日本語の‘すみません’の多様な意味も分かるようになって、実際留学中、この言葉を有効に使うことができました。このような準備過程は、自分の専門でもある文化人類学にも役に立ちました。文化人類学の目標とも言える‘多文化を理解する、そして自文化を改めて観察する’ことが実践できました。日本で住む際にも不思議と思うことがありましたけれども、UFの事を思い起こし、暖かく日本の文化を受け入れました。私の発表には映像を使ったので、映像で演技をしました。それが上手に出来なくて、みんなと笑いながら撮ったのが印象に残ります。日本留学では沢山の思い出がありますが、やはりUFの事を一生忘れられません。余談ですが、第37回のUFにも参加させてもらい、タイの伝統踊りを学ぶことができました。タイの伝統踊りをしっかり披露するタイの留学生をみて感激しました。しかし、韓国の伝統踊りにあまり詳しくない自分が情けないと思い、帰国して韓国の伝統民謡や踊りを自ら探して身につけるようにしました。

UFは母国を日本にいる人々に紹介する場でもあり、母国について自分がどれくらい知っているかに気付く場であると思います。それで他者と自身の両方を深く理解する絶好の機会です。そして日本人の友達や他の国の友達と付き合えます。この立派な行事を行っ

てくださった国際教育センター、CISG、ユネスコの皆様に感謝しております。UFが50回、100回を迎えるようにお願いします。

なお、現在、私は韓国国立全北大学大学院で文化人類学を続けて勉強しています。‘近くて遠い’韓国と日本の両国で活動する研究者を目指して頑張りたいと思います。UF最高！

〔R 5 オキ・ディタ・アプリアント（インドネシア） 36回発表〕

日本文部科学省からの奨学金で千葉大学に留学するチャンスを得て、最初にやりたいと思ったことは、日本人の皆さんにインドネシアを紹介することでした。そこで、千葉大学CISGのみんなと出会い、UFというイベントを知りました。「これがインドネシアを紹介するチャンスだ！」と思って、すぐに出ることを決意しました。

当時、在日インドネシア学生会と一緒にアングルンという楽器の練習もやり始めました。練習だけじゃもったいないなと思って、UFでアングルンの演奏をしようと決めました。同じく可愛いインドネシア人タタと一緒に国セに行って、千葉大国際交流会館を毎週の水曜日午後6時から8時、2ヶ月ぐらい借りました。もちろん国セの係員に聞かれましたが、「UFの練習のためです」とちゃんと答えたので、2ヶ月間使わせてもらいました。いよいよUF。12月に入り、ちょうど冬で寒い日でした。しかし、在日インドネシア学生会のみんながバティックを来て、アングルンの演奏をやりました。バティックはインドネシアの伝統的な服でけっこう薄いので、その後風邪を引いてしまったメンバーも何人かいました。でも、成功したアングルンの演奏は何よりでした。日本の歌「さくら」や、インドネシアの「Bengawan Solo」を演奏し、最後にお客さんと一緒に歌った「さようなら」の歌も最高でした。交流会にも、たくさんのお客さんが来てくれて、アングルンの演奏をしてくれました。お客さんは日本人だけでなく、他の国の留学生の友達も来てくれたので、最初の目標よりも多くを得られて、本当に嬉しかった。CISGや国際教育センターのみなさん、他の協力をしていただいた方々に感謝をしています。今度は院生として、また来日しようと思うので、そのときまたよろしくお願いします。

（現 インドネシア・スラバヤ ドクターストモ大学 日本語教師）

〔R 6 スリベッチャン・カエシネ（タイ） 37回発表〕

2010年6月の第37回千葉大学UFで発表したタイのモモです。私はタイダンスを紹介しました。またタイの4つの地方のダンスを舞いました。正直に言いますと、初めて舞台上でタイダンスを踊りましたから、発表の準備、ダンスの練習、そして衣装の用意がいろいろ大変でした。特に、このショーの中にはタイ人はたった二人しかいなかった



ので、皆が舞い揃えるようになるまでは時間がかかって、疲れました。しかし、CISGの皆からの協力と応援、そして皆が頑張ってくれましたから、発表が成功しました。タイの文化を皆さんに伝えられたのはすごく嬉しくて、いい経験になりました。それに、私にとって素晴らしい思い出となります。UFに発表できて本当に良かったです。

(現 タイ・カセサート大学大学院生)

[R7 オースィキナ・アーニャ(ロシア) 37回発表]

「いや、ロシアに関しては特に何も紹介したくない」と言った時の私は、UFに懐疑的だったように思えます。日本人とロシア人はお互いにステレオタイプをもとに、「あの国はエキゾチックだ」と考えがちです。例えばロシアの白樺に対して日本の桜、ウオッカとボルシチに焼酎と寿司、マトリョーシカにハローキティといったイメージがその例です。こうしたステレオタイプに基づくイメージもどこか面白いですが、一方でそれだけではよくないとも感じました。そこで考え直して、私も是非このイベントに参加させていただくことにしました。

私は自分の発表のなかで、私の持つ個人的なモスクワの印象を紹介することにしました。ソ連時代のアニメーションを使いながら、一般的なロシア人の生活について説明しました。60年代の古いアニメーションなのに、市民の事情は今とあまり変わっていない点が面白く感じられます。そして時代が変わっても、ロシア人の性格は相変わらずです。私は発表を通して、こうした有りのままのロシア人の心を見せたいと思いました。



そうしてUFへの参加は、私にとって非常に重要なものになりました。UFに参加した留学生達は、自分の母国について誠意を持って発表していました。発表者は自分の好きなことや大切なことを分かりやすく説明しており、そこから彼らの母国に対する想いが感じられました。私も日本人学生のおかげで、目標を達成することができました。彼らと一緒に頑張り、そして仲良くなりました。準備や練習、リハーサルは、全て真面目でかつ楽しいものでした。

発表の終わりに日本人の友達とロシアの歌を歌っている時に、私の心の中に感動が溢れてきました。彼らはロシア人の心をよく分かってくれたに違いありません。

(現 ロシア国立人文大学大学院生、ロシア研究大学高等経済学院東洋学部 日本語教師)

[R8 プララハド・ウブレティ、アヌパマ・ポウデル (ネパール) 38回発表]

The word 'universal' itself reflects the meaning that it covers the whole world and the ' festival

'itself is the mirror image of ones culture and heritage including all about the peculiar specialty of ones country. Organizing such an informative opportunity in one roof is itself like a world-tour within a short span of time which is so praise worthy. The credit of such a knowledge-sharing platform known as Universal Festival is being observed in Chiba University for last two decades, which shows that Universal festival is being carried out from long back having its own prestigious history.



交流会での2名

With a passion of introducing Nepal, we participated during 38th Universal Festival in 2010 and introduced our home country Nepal. Though Nepal ranks among the top ten international students by origin in Japan, Nepali students are very few in Chiba University. Even then we two determined and tried to accept that challenge as it was the best timing to fulfill two purposes: introduce Nepal as well as support Visit Nepal Year 2011. I did presentation about Nepal while Anupama had a dance in Nepali song. The applause from the spectators was encouraging and motivating. The grand success of that event was possible only through the active support of Japanese volunteer students and Kenjo Sensei. We felt lucky enough to get so many helping souls. We found Japanese volunteer students very enthusiastic and kind hearted. They were always helping us in whatever, whichever means they can to make a program a grand success.

We wish Universal Festival celebrated in our Chiba University may become one of the best platform of sharing the peace love and justice through out the world. Since future lies in the students' shoulder only international understanding will bring peace and priogress to all. Together we can.

We salute the organizing committee for making this event to 40th edition. It is our pleasure to share our experience in this auspicious moment. We wish all the best for the grand success of upcoming events in the future.

On behalf of all foreign students, we would like to thank all those Japanese student volunteers who are the driving force for the success of this festival. We hope they were, are and will be always helping hands in this noble cause.

Talking about our own experience of Universal Festival, we found it as very informative for the spectators as well as for us. We felt proud of being one of the messengers of our country who is introducing ones country in the foreign land in front of different people around the world.

Sincerely

Pralhad (Graduate School of Engineering), Anupama (Graduate School of Engineering)

[R 9 鄭ホチョン (韓国：第38回、40回発表)]

親しい先生の誘いで参加した 第38回 UFでは、一人で「サンモ」(帽子に白い長い紙をつけて回すパフォーマンス)を行いました。そして、第40回の発表では、第38回の発表と違う新しい内容を見せようと思いました。そして、学ぶことからはじめ、音楽練習、プレゼンテーションまで、3ヶ月の準備を経て、6名の仲間と「サムルノリ」(4つの伝統打楽器で行われる韓国の伝統音楽)と「ボナ」(木の棒で皿を回すパフォーマンス)の発表をステージで披露することができました。

この発表を通して、日本人や他の国の留学生に文化を紹介する同時に、一緒に参加した韓国の留学生たちに‘もっと母国の文化を外にアピールするべきだ’と言うことと、‘韓国の文化について知らない人に対して、どうやって説明すればいいのか’を考える機会を作ることができました。

特に、韓国は日本と昔から現在まで、盛んに文化交流が行われています。日本人の中には、韓国文化をある程度知っている、わかっている人がいるだろうから、僕たちはもっともっと文化を勉強して、韓国文化を理解しなければならなかったと思いました。

練習は難しかったですが、発表は楽しくできたと思います。また、練習場所を探すときに、新しい人に会い、親しくなったり、会った人に文化紹介をすることの中で、発表でのアイデアを貰うことができたので、自分にとって勉強になりました。機会があったら、また参加したいと思っています。

(現 理学部2年)



「サンモ」(38回UFにて)

[R 10 田蘊墨 (中国：39回発表)]

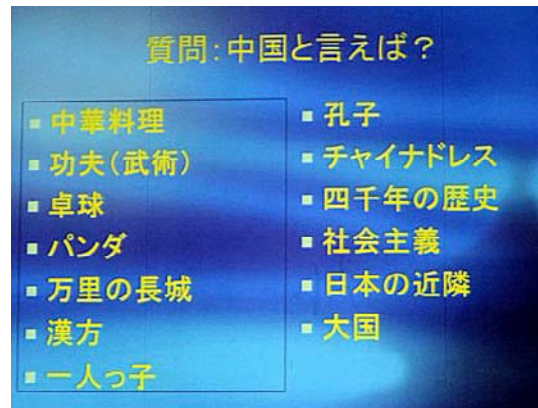
私は、2011年6月の第39回UFで、中国の発表をしました。古代から中国と日本は文化をはじめ、ありとあらゆる面で互いに勉強しあい、交流してきました。近代になると中国から伝来した漢字を日本でアレンジし、中国に逆輸入するケースも多々うまれました。そうした中で、UFで自国を紹介するチャンスを頂けたことを誠にうれしく思っています。

さて、友好的な交流だけでなく、現在の両国の間には不愉快な事件が発生していることも否めません。靖国参拝問題、尖閣諸島(釣魚島)事件、毒餃子事件などです。UFの発表で、私は、地理的に中国と日本は一衣帯水と話しましたが、実際心の距離は万水千山(距離がとてつもなく長いこと)のようになっているのではないのでしょうか？

こうしたなか、我々学生または国民はどうお互い付き合っていけばよいのかが焦点となってくるでしょう。中国と日本の間でこうした問題が絶えず起こる根本な原因は、歴史の見方が、双方で食い違うことです。中国では抗日戦争を細かく描写し、現在も小中学校

で教えています。一方、日本ではこうした侵略史をあまり学生に教えていません。このような違いが現在我々市民レベルの交流を大きく妨げている大きな問題なのではないかと思っています。確かに愛国主義を掲げて、過剰に敵対感情を煽ぐのも無理を伴いますが、歴史を正視しないと、明るい未来を築き上げることは出来ないでしょう。

このように、歴史問題やマスコミの扇動性などによって、両国民の間に壁ができていま



田くん作成PPTより「日本人の中国イメージ」

すが、互いを理解しあう上でどうしても市民レベルの交流が必要不可欠となってきます。人と人との真正面での話し合いが互いの不信感を和らげ、相互理解へと繋がっていきます。そして、こうした市民レベルの交流の拡大は、マスコミを牽制し、更には政府を動かす力になってくるでしょう。実際、中国では日本のアニメ文化が若者の間で非常に浸透しており、上海、北京等の大都市ではメイド喫茶、秋葉原を真似したオタク街のようなものも出来ています。こうした文化交流が相互理解へ繋がっていくのではないかと思います。私がUFで発表したのも、そうした気持ちからでした。今後もこうした発表や交流を通じ、両国の架け橋になれるよう日々努力昇進し、また両国が真の友情を築き上げられることを心から願ってやみません。

（現 法経学部2年）

〔R11 グエン・トゥック・ジウ・ハン（ベトナム：40回発表）〕

千葉大学第40回UFに参加できて、本当によかったと思います。私の人生で一生忘れられないことになりました。大勢の前で発表することがもともと苦手な私は、今度のUFでベトナムの文化について発表することになりました。発表の直前、怖かったです。「もしできなかったら、もし途中で原稿忘れたら…」その「もし」が私の頭の中で何回も繰り返されていました。そのときに、突然、「ハンさん次ですよ。頑張って！」と聞こえました。



ベトナム民俗舞踏の紹介（右手前がハンさん）

た。後ろを振り返し、日本人のスタッフたち、ベトナムチームの仲間たちの笑顔が見えました。そのとき、大切なことを分かってきました、「私は一人じゃない！」。

UFでは、ベトナムの伝統衣服・アオザイについて紹介し、皆に興味を持たせることができ、よかったと思います。それだけではなく、私も、発表のためにアオザイについていろいろ調べて、前に知らなかったことも分

かってきました。国のアオザイを前よりもっと好きになりました。ステージでは、アオザイのファッションショーもやりました。ベトナムの仲間たちだけでなく、日本やアメリカの友達も参加してくれました。練習のとき、いろいろ話や交流ができて、楽しかったです。本番は、誰も皆緊張していたと思いますが、頑張ってくれました。そのとき、国籍にかかわらず、皆と一緒に同じステージでたって、感動しました。国境が越えられたと感じたからです。

日本の文部科学省から奨学金をもらって日本で留学することができた私はラッキーな人間だと思います。そして、UFのような交流会に参加できてもっとラッキーでした。楽しくて、いろいろ学べてきました。ずっと忘れないことです。私にこういう機会を与えてくれた皆さんに、本当にありがたいと思っています。まだ参加したことがない皆さんはぜひ参加してみてください。私のように一生忘れられないことになると思いますよ。

(現 工学部3年)

[R12 ユンゲ・トビアス (ドイツ: 40回)]

千葉大学人文社会科学研究科に一年間の留学をしているトビアスです。ドイツの故郷ライプチヒで4年間日本学を勉強し、いまは大学院の2年生です。UFで発表をするかどうかについて考えたときに、大勢の聴衆の前で日本語による20分間のスピーチをすることはちょっと怖い考えでした。でも、もし、そのようなスピーチをすれば、面白い経験ができるだと思いましたから、参加しました。一人でやった場合は、ちょっと怖い経験になったかもしれませんが、運よくすばらしい仲間がいました。スピーチの作成は時間がかかったのに、このチームのおかげで楽しい経験になりました。何度も日本語チェックやパワーポイント作成を手伝ってくれたり、質問があったら、すぐに助けてくれました。

初めは3回もリハーサルをやることをちょっと多いと思いましたが、結局は有益なことでした。リハーサルのためにスピーチに慣れて、緊張が減りました。その上、他のCISGメンバーからの改良の提案でスピーチをさらに修正しました。UF当日、私は本当に緊張しましたが、リハーサルや準備や皆の応援のおかげで、スピーチが良くてきたと思います。

UFは本当にいい経験でした。私は他の留学生にも参加を推薦したいと思います。日本語でスピーチを作成することは簡単ではありません。時間もかかり、いい経験だけではありません。でも面白い経験ですし、CISGの中で新しく知り合い、友達もできます。

(現 大学院人文社会科学研究科 短期留学生)



【CISG（元・現）スタッフたち】

〔C 1 崔萬熙（チェマンヒ）（2004年度工学部3年次編入） 韓国：28回発表者〕

※見城注記 崔さんは、CISGの歴史の中で、唯一留学生として全体リーダーを務めた経験を持つ。

UFが40回目を迎えたことを真に嬉しく思います。私が初めてUFに出会ったのは、CISGを通じてでした。新入留学生たちを対象に、日本生活になれるよう手伝ったり、留学生たちと交流をしながらお互いの違うところを認識して学んだりすることは、有意義だと考え、私もやってみたいと考えて、CISGメンバーになりました。そして、新入留学生寮ガイド、稲毛寮での料理パーティー、体育大会、UFなど、多くのイベントと一緒にしながら、他国学生たちのライフスタイル、考え方、自然と地理、他国の出来事、言語などを、マスコミからではなくネイティブから直接的に聞くことができるととても良い体験だったと思います。

また、私は28回UFで、韓国文化発表もしています。その中で一番記憶に残ることは、サムルノリ演奏です。韓国民俗楽器演奏を中国人、ミャンマー人、日本人と一緒にしましたが、準備過程をととても楽しんだ記憶があります。また国際教育センターおよび千葉韓国教育院の援助を頂いたことを、今でもありがたく思っています。

私が思うUFの意義は、一つの公演として完璧さを見せることよりは、準備過程で日本人学生と留学生たちの間の考え方の交換および異文化体験ができるということにあると思います。お互いの考えが違うから、UFを準備する過程に葛藤が生じるのは当然です。しかしそのようなところを認めながら、新しい文化に触れることはとても貴重な体験だと思います。

今回40回となるUFの活動を通じ、今後も千葉大学内および学外のたくさんの人々が、新しい文化体験ができるように、倦まず弛まずUFが引き継がれて行くことを期待します。

（東芝半導体（韓国法人）のField Application Engineer 3年勤務経歴ののち、
現在転職活動中）

〔C 2 日吉健一朗（2007年度理学部入学）〕

「UF40回記念」の文章を書く機会を頂けて大変光栄です。私は以前から、大学に入ったら国際交流してみたい、と漠然と思っていました。そして、サークルの日に見つけたのが、我々がCISGであり、その後のUFを観て入会を決めたのでした。留学生が日本語を使って自国の事を楽しそうに紹介する姿がとても印象的で、留学生と関わりたいという気持ちがより強くなったのを覚えています。

ただ、私が初めて観たUFは、それまでのUFとは違っていらしいのです。つまり、企画・運営が学生によるものではなく、先生方や事務の方によるものだったのです。今のCISGのメンバーの中には「え、どういう事？」と思う人もいるかもしれませんが、とにかくその当時はCISGに稼働できる学生がいなかったのです。UF40回目という今でこそ、

大勢の学生がCISGのメンバーとして活動していますが、私が入会した当初、いわゆる現役メンバーは新人である私と小牧くんの二人だけでした。正直なところを言えば私自身、まさかこんな状態だとは思っておらず、この先やっていけるのかと不安を感じました。とにかく当時は、見城先生や忙しいなか時間を割いて来てくださる先輩の話を聞き、それまでのCISGの活動を維持しようと必死でした。イベントがあるごとに、先生方や事務の方はもちろん、先輩方にも力を貸していただき、CISGとしての活動を少人数ながらもなんとか形にすることができたのでは……と思っています。負担に感じる事がなかったといえは嘘になりますが、留学生と密度の濃い楽しい時間を過ごすことができ、とても充実していたのも事実です。とても良い経験をさせていただきました。

そして、その翌年度から加速度的にCISG人口は増える事となります。これはひとえに朴くんの力だと思っていますが、その詳細を語るのは彼自身に譲ります。現在はU Fだけでなくそれ以外の活動も盛り上がっています。U F、CISGに微力ながらも関わった一人として、これから将来も留学生と共に歩み、支えるU FやCISGの活動を応援していきたいと思います。そして、次の節目のU F 50回、さらに先へと続いていくことを願っています。

(マクドナルド 店舗従業員)

[C 3 小牧泰大 (2007年度理学部入学)]

2007年の第32回U Fを担うことを決めたのは2人の学部1年生だった。化学科の日吉と物理科の私である。経験の浅い2人であるが、よくぞU Fの開催を決断したものである。(後々、見城先生から手伝ってくれる学生を紹介してもらい、U Fの運営に目処を付けることができた。)

そして、韓国、ガーナ、ネパールの三ヶ国を紹介することができた。私の主な仕事はガーナ紹介のパワーポイントを留学生とともに作成することであった。ガーナ人の彼女は日本語が上手く、私は彼女に「いじられ」ながら、スライド作成を手伝っていた。

私はもともとCISGに入る予定など無かった。「サークルの日」もすっぽかし、CISGというボランティアは名前すら知らなかった。しかし、ドイツ語の授業で出会った日吉にどうしても引かれてしまった。クラスの前の席に陣取っている学生というのはバイタリティがある。外国語の初めの授業は自己紹介から始まるのが常であるが、そこからいつの間にか意気投合し、いつの間にか彼の所属するCISGに私まで所属してしまっていた。

このU Fを開催できたことは、その後のCISGを語る上で重要な意味を持っている。すなわち、以降でCISGの主要人物となる朴君がこのU Fを見てくれていたのである。

(大学院理学研究科修士1年)

[C 4 朴俊平 (2007年度工学部入学)]

私がCISGに加入したのは、32回U Fを鑑賞し、千葉大学にいながら他国の文化を体感できる事に感銘を受けたのがきっかけでした。そして「私も留学生を支援したい!」と強く

思った……わけでは無いのですが、様々な国の方と知り合う機会が有り、面白そうだと思います、加入しました。

しかし、私が加入した当時はスタッフが6名で、活動縮小も選択肢に有る状況でした。そんな中、私は入会したばかりだったにも関わらず、なぜか“CISG再建”に息巻き、先輩方や同期と勧誘に奔走しました。と言っても6名では大した勧誘活動も出来ず、他団体に協力を仰ぐ等工夫しながらの活動でした。そしてその甲斐もあり、私にとっては初めてとなる33回UFはスタッフ数20名程で迎えることが出来ました。

その後私は国担当補佐や副リーダーで35回まで携わりました。運営する側になり感じた事は、UFとは、留学生と日本人学生が異文化間の理解を深めながら一つの目的に向かう、その過程にも価値のあるイベントだという事でした。私は国担当には就きませんでしたが、CISGスタッフと発表者が紆余曲折しながらも協力して作り上げていく様を見てそう感じました。と同時に感じた事は、「結構大変（笑）」。打合せや学内外への宣伝、リハーサル等タフな作業で、想像以上に大きなイベントでした。そんなUFでしたが、日本で一番の思い出としてUFを挙げてくれる留学生がいたり、準備が大変で「こんな大変ならやりたくなかった」と言っていた留学生が、発表後には晴れ晴れとした表情で「やって良かった」と言ってくれたりした事が、私にとっては何にも代え難い事でした。

加入当初の思いとは異なりますが、CISGが運営するイベントの質を向上させる事が、留学生支援に繋がると考えていた部分もあります。数年前、仲間達とスタッフ勧誘に奔走し、それに共鳴してくれた数多くの後輩達（35回の時点ではスタッフ数60名程で、体制もある程度は整えることが出来ていました）が、不完全であった体制を改善しながらCISGを運営してきました。活動縮小も視野にあったCISGが、40回の節目を磐石の体制をもって迎えてくれた事は、私にとって大変嬉しく、また誇りにも思います。この40回を通過点とし、50、60…100回と、後輩達が更に発展させてくれる事を楽しみにしています。

UF開催に際し、先生方を始め多くの方々から御支援・御協力を頂きました。最後になりましたが、皆様方にこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。本当に有難うございました。また、真剣に議論し、時には対立し時には讃え合い、その他大半を下らない話に割いたCISGの仲間達にもこの場を借りて御礼申し上げます。尊敬できる先輩方、個性豊かな同期達、なぜだか慕ってくれる後輩達。CISGで過ごした時間はとても濃く、CISGで出会った皆は私の大学生活における財産となりました。本当に有難うございました。

（大学院工学研究科修士1年）

〔C5 玉腰大悟（2008年度医学部入学）〕

私がCISGに加入したのは2年の春でした。一年間の亥鼻キャンパス中心での生活に満足しながらも、教養展開での国際協力についての講義や春休みの短期語学留学を経て、自分の世界の狭さに疑問を持ち始めた時期でした。そして、留学生の友達に誘われて参加したWelcome PartyでCISGへの参加を決めました。千葉大にもこうして世界中からの学生

が集まっていて、彼らと積極的に交流している日本人学生にいたというのが、やや驚きでもあり、嬉しかったです。CISGで最も大きい行事が年2度のUFで、私は2年前期には韓国班の発表、後期は副リーダーとして携わらせていただきました。発表者側としても裏方側としても関わったことで、他団体との連絡や大きなイベントの運営についても学びながら留学生と交流できたと思います。また私はChatroomの再開にも尽力したため、短い期間にも多くの留学生と会う機会に恵まれました。その中で次第に留学生の出身国のニュースが気になるようになり、様々な国の状況を自ら興味を持って知ろうとする態度が身についてきたように思います。これから先も多くの学生が、CISGで留学生と友達になりUFで各国の文化を学ぶことから始めて、世界基準のものの考え方ができる国際人に成長していくことを願います。

(医学部4年)

[C 6 平石知秀 (2008年度教育学部入学)]

2009年6月のUFで、タイの国担当として、仲間3人とタイからの留学生2人の発表のサポートを務めました。私達の発表は、旅をテーマにした劇でした。千葉大生がタイへの旅行中に、タイの学生2人と出会い、タイの観光地を案内してもらうという内容でした。

特に、印象に残っているのは、発表者のとの本番直前でのやりとりです。発表者の1人が体調を崩して、当日参加できるかわからない状況でした。私は、その知らせを聞いた時、発表をどうするかで頭がいっぱいでした。すると、本人から「発表が大事で、私のことはどうでもいいんでしょう」と言われました。私は彼女の体調やどんな気持ちでいるかを考えることができなかったのです。そのことを謝罪してからは、本音をぶつけあえるような関係になりました。幸いにも彼女の体調も回復し、本番では練習の成果を発揮することができました。UFの国担当の仕事は苦労の連続でした。その分、発表者の2人と一番近くで接することができ、異国の地に勉強に来ている2人から様々なことを学ぶことができました。

実は、私はUFの翌年に千葉大学からの派遣留学生になっています。派遣先はタイです。UFで留学生が自国の文化を紹介している姿を見て、留学が身近になり、私も日本のことを伝えたいと思いました。また、タイの国担当を務めてもっとタイのことを知ってみたいと思いました。これらも私が留学を決意した大きな理由になりました。今振り返って見ると、このUFの経験が、私のタイへの派遣留学の基盤となったのだと思います。

(教育学部4年)

[C 7 中村 萌 (2009年度文学部入学)]

今回UFが40回を迎え、この伝統ある企画の一スタッフとして参加できたことを大変嬉しく思います。私は第36回と第37回のリーダーを務めました。UFについての説明会を開くと、思いのほか多くの留学生が興味を持って集まってくれ、異国の地でも積極的に行動できる彼らにとっても感心したのを覚えています。それぞれの回に共通して言えることです

が、発表はそれぞれ興味深い内容で、来場して下さったお客様にもこれまで以上に満足していただけたことがアンケートによって目に見えてわかり、私自身とても嬉しかったです。

しかし、私がリーダーとしてUFという一つの大きな企画を成功させることができたのは全て自ら手を挙げてくれた留学生たちと、共に作り上げた仲間であるCISGメンバーのおかげです。留学生にとって、発表準備の負担を考えると、ただでさえ忙しい授業との両立は非常に難しかったと思います。その上、こちらの都合で留学生の意向を取り入れられないこともあり、発表に関して納得のいかないことも少なくなかったと思います。それでも、あきらめずに発表練習を何度も行ってくれた彼らは本当に素晴らしいです。自国の文化に誇りを持ち、それを伝えたいという意識の高さに感動しました。

そして、CISGメンバーはリーダーである私以上に働いてくれました。私は、彼らが留学生のために、見てくれるお客様のために、時間をかけて一生懸命作ってくれたものを一つのかたちにするべくまとめただけです。授業の試験期間と重なる時期、発表担当のスタッフに対し真夜中に資料提出の催促メールを送ったことがありました。余裕をもって完成させたいという気持ちから、メンバーにはかなり無理をさせてしまったと思います。それでも最後までついてきてくれた仲間に、私は本当に感謝しています。

結果、留学生たちが発表をしてよかったと言ってくれたこと、お客様からお褒めの言葉をいただいたこと、そして何より、仲間の「やりきった」という満足そうな笑顔を見られたことが私にとって最大の喜びでした。リーダーとして、頼もしい仲間と協力しながら支え合い、一つの大きな目標に向かって一生懸命になることの楽しさを実感することができました。このような貴重な体験を二度もやらせていただけて、本当によかったです。最後になりますが、私たちのために、これまでのUF企画のために、協力して下さった全ての皆様に感謝します。

（文学部3年）

[C 8 羽田 司 （2009年度教育学部入学）]

2010年12月の第38回千葉大学UFは、ネパール・ベトナム・韓国の3カ国にCISGからの特別発表を加えた盛りだくさんの回となりました。ここ何回かは3カ国からの発表が多く、たくさんのCISGメンバーがその状況に慣れていたので、発表数が増え、一つ一つの発表にかけられる時間が短くなったり、それぞれの仕事が多くなったりと、苦勞する場面が多くありました。しかし、各分担の人が仕事を全うしてくれたおかげで大きなミスもなく、第38回を行うことが出来、リーダーとしてホッとしました。

ただ、反省点を挙げるとすれば、もっと早くから準備を行うべきであったということです。決して準備の時間が極端に短かったわけではないのですが、発表が多かったこともあり、いつもよりも問題も多くありました。それを解決して更により発表するには時間がなかったように思えます。そんな中、原稿やスライドを一日で直してくれたり、連日のリハーサルを遅くまで残っておこなってくれたり、発表者のみなさんには本当に迷惑をか

けたと同時に助けていただきました。感謝しています。

また、フェスティバル後にご来場いただいた方々からのアンケートに目を通すと、たくさんの温かいお言葉とともに多くのご意見ご要望をいただきました。それには準備不足からであろうご意見も多々あり、準備不足はやはり隠せないのだと痛感し、今後はよりしっかりと準備をおこない、更により発表にしようとCISGで再認識させられました。

UFは異国文化を千葉大学近隣の方々に知ってもらおうと同時に、千葉大学に留学してきた学生の思い出になればよいと思っています。私はこの試みが双方に有意義でとても良い活動だと考えているので、これからも長くUFが続いてくれることを願っています。

(教育学部3年)

[C9 中澤優理子 (2010年度文学部入学)]

UFの終了後、けやき会館の前で発表者、CISGスタッフ全員で集合写真をとるのが、毎回恒例の締めくくり方です。第39回UFでリーダーだった私は、写真撮影後、全員の前でこんなあいさつをしました。「発表者のみなさんを本当に尊敬します。日本語が第二言語であるにも関わらず、大勢の人の前でステージに立ち、堂々とあんなにすばらしい発表——歌もダンスもプレゼンも——ができるなんて。本当にすごいことです。」

私は今千葉大学からの派遣留学生としてアメリカ・ウィスコンシン州立大学に留学中です。この気持ちは自分自身が留学生となって一段と強くなりました。こちらでは英語の勉強をしているのではなく、自分の専門、また学びたい分野を現地の生徒にまじって授業を受けています。もちろん講義でもディスカッションでも自分は現地の生徒と同様に扱われますので、留学生だからといって特別扱いされることはありません。教授の単語一つ一つを聞き取るにも必死ですし、レポートで自分の言いたいことを一文書くだけでも、単語や文法を調べながらだと相当な時間がかかります。日常会話だって同じです。アメリカ人の友達の早口についていけずに、「優理子はどう?」と言われてもうまく答えられず悔しい思いもたくさんしています。

そんな経験をして、UFを思い返してみると、発表してくださった留学生のみなさんは、本当に堂々と自信をもって母国について語り、歌や踊りといった素敵なパフォーマンスで私たちを魅了してくれました。私のリーダーとしての最初の仕事は、発表者探しだったのですが、説明会を行っても、ビラを配ってもなかなか立候補してくれる方が現れませんでした。それもそのはずです。異国の大きな舞台での発表なんて勇気のいること。日本語が母国語でない彼らにとっては大きな挑戦です。きっと留学生たちの、母国を愛する気持ちが彼らを動かしたのでしょうか、準備からリハーサル、発表まで一生懸命に努力してくれる姿に感動しました。

彼らとは今でもFacebookなどで時々連絡しあっています。留學生活中、つらいことがあって愚痴をこぼしたりすると、「気持ちはわかるよ、頑張って」と励ましてくれます。UFの集合写真を見て、みんなも頑張っていたのだから私も頑張ろうと思えます。私はU

Fを通してリーダーとしての仕事だけでなく、難しいことでも挑戦していく勇気を彼らから学びました。（文学部 2 年）

〔C10 齋藤有紀子（2010年度教育学部入学）〕

私は、第40回UFリーダーを務めるということが決まった時からずっと不安でした。なぜなら、今まではUFの脇役を担当することが多く、このイベント自体がどう動いているのかさえ知らなかったからです。さらに、第40回記念ということで特別企画もやって盛り上げなければいけないというプレッシャーもあり、私が果たしてみんなをリードして成功させられるのかととても不安でした。実際、各自の係が決まってUFの準備をする時期になっても、何を指示すれば良いのかわかりませんでした。

しかし、前回のUFリーダーが、今後のリーダーのためにと残してくれた仕事ノートを読み、わからないことは先輩に聞くなどして自分のできる限りのことをやったら、あとは皆がそれぞれしっかり準備を進めながら、随時私に報告をしてくれたので、私は特に心配もなく安心してそれぞれの仕事をみんなに任せることができました。

リハーサルも、みんな早めに来てくれて機械の操作を手伝ってくれたり、他の人の発表を見てアドバイスをくれたりして本当に助かりました。発表に参加してくれた留学生も、授業が忙しい中大変だったと思いますが、なんとか期限に間に合わせようと、パワーポイントの作成やパフォーマンスの練習を頑張ってくれて、当日では素晴らしい発表を見せてくれました。

最初は何もかも不安だったUFリーダーでしたが、周りのみんなのおかげでイベントを成功させることができ、今回で知り合えたメンバーもたくさんできて良かったです。今思うと、大変だったことも全部いい思い出です。UFリーダーをやって本当に良かったです。メンバーはもちろん、発表者の留学生や、協力してくださったユネスコのみなさん、そして来場者のみなさん、心からありがとうございました。（教育学部 2 年）

【大学関係者】

〔D1 廣橋光治（元留学生センター長、工学部名誉教授）〕

私は2001年4月から2004年3月までの短期間ではあるが、留学生センター長を務めさせていただいたが、その職に就く前からUFについては知っており、一聴衆として参加させていただいていた。その素晴らしい各国のパフォーマンスと異文化交流が、40回も継続していることに対して、センターの教員、CISGの学生、ならびに地域からいろんな形でボランティアとしてご協力をいただいている皆さんのご苦労に感謝すると同時に、今後とも継続していただきたいと考えます。

さて私が関与するようになった当時は、プロと間違えるような充実した異国民族芸能が紹介されているのに、けやき大ホールの観客は少なく、寂しいものでした。いろんな形で“開かれた大学”へ展開していこう！と努力し始めた当時の千葉大学の方針もあり、世界

40ヶ国以上からの学生が在学している財産を、千葉地域の一般の皆さんや学内日本人との異文化交流を積極的に推し進めるべく、間口を広めるように広報活動をしました。その結果、地域の高校生や一般市民も参加し、また学内留学生も多数参加してくれ、大分賑やかにはなったが、依然として日本人学生の参加は少ない。

どこかの大学では希望者が多くて、抽選でないと入場できない発表会もあるようです。今後は学内の有望なサークル、例えば落語、吹奏楽、合唱、マジックなど、あるいは学内の教職員によるオペラ、狂言、お琴などの発表も複合化させるとか、学長と留学生（複数国）との対談を設けるとか、少し時間も長くして、真の異文化交流UFに発展させてはいかがでしょうか。千葉にいながらにして世界中の民族文化を享受できる機会を何故活用しないのか不思議に思います。もっと多くの、特に学内教職員・学生に参加願うための方策としてあえて提案します。

いずれにしてもUFのますますの発展を祈念するとともに、今後とも継続していただくことを、私も楽しみにしています。

[D2 福成陽子（元留学生課職員）]

私は他国の文化に触れられる催し物が大好きです。UFはその好例。普段留学生課の窓口で対応していても見ることでできない留学生の姿や、彼らの母国のことを知ることができる、大事な場でもありました。伝統楽器の演奏や民族衣装のファッションショー、伝統的なダンスのパフォーマンスなど、見て聞いて楽しめるプログラムがいっぱいのUFには、毎回自分の子供も一緒に連れていきました。特に40回目を迎えた今回は派手なパフォーマンスが多く、子供たちも留学生の発表に見入っていました。グローバル化が進む中、小さい頃から英語を習うことも大事かもしれないけど、いろんな文化に触れ、刺激を受けることも大切な経験になると思います。

UFで留学生の発表を見ると必ず思うこと、それは自分が日本の文化を他国の人に紹介するにはあまりに知識がなく、ダンス的なものといえば盆踊りをしたことがあるくらい、邦楽といえばお琴を少々爪弾いたことがあるくらいで、恥ずかしいなあということ。せめて伝統衣装だけでも自分で着られるようにと、退職後着付けを習い始めました。UFは自国の文化を見つめ直すいい機会にもなりました。

千葉大学は離れましたが、またぜひUFを見に足を運びたいと思います。

[D3 池田健雄（千葉大学大学院人文社会科学研究科修士課程、2012年4月からは博士課程1年）]

私は定年後に歴史を学びたく、2006年4月に文学部史学科に入学し、日中関係史を大学院で専攻している68歳の青年です。毎年2回開催されるフェスティバルに、観客として入学以来12回連続で参加させて頂いています。

これを運営するCISGの学生の皆さん、国際教育センター教職員の皆さんの協力と何よ

りも留学生の皆さんの情熱が毎回心に伝わり感動しています。留学生の皆さんは本国の代表として自国紹介のプレゼンテーションや本国の歌や踊りなどのパフォーマンスに就いても工夫をされ、多忙な学業の傍らこの為に準備をされており、いつも大きな拍手をさせて頂いています。また、交流会でも、留学生が作った料理や千葉ユネスコ協会のご提供による「太巻き寿司」などで、いつも楽しいひと時を過ごさせて頂いています。

さて、私は文学部1年当時から留学生のサポートをする「チューター」を務めさせて頂いています。また、社会人として、千葉大入学以前より千葉市国際交流協会の賛助会員と中国語通訳に登録しています。管見によれば、千葉大では全学的組織として国際教育センターがあり、学生組織でCISGがあり、また学部毎に留学生支援の組織や学生組織があります。文学部・人文社会科学研究科には国際交流室とフォルクの会があります。それぞれの組織では、新学期には留学生歓迎パーティーがあり、私も毎回参加しています。

UFでは、地域の多くの皆様が留学生を応援し、参加くださる姿に感謝していますが、残念なのは、本校学生・院生の参加者が少ないことです。それを克服し、UFが今後100回、200回と続く事を祈願したいと思います。

【協力者・一般参加者】

[K 1 中田陽一（千葉ユネスコ協会）]

千葉大学UF40回おめでとうございます。世に継続は力なりと云いますが、正に20年もの長きにわたり継続されてきたことは素晴らしいことです。私もユネスコメンバーも第30回頃から参加させて頂いておりましたが、09年6月25日の35回からは継続参加しています。そして同年12月17日の36回からは本格的に協賛、千葉伝統郷土料理である太巻き寿司の卵巻きと海苔巻きをレセプションで提供し、留学生や若い人達に日本の米文化を知って貰っております。また世界寺子屋運動や世界遺産のパネルを展示し、ユネスコのPRもしており、最近では世界遺産DVDをパソコン数台で観て貰っています。そんな中でユネスコを理解し、ユネスコの学生会員になって手伝ってくれている古参留学生さえいます。

私たち千葉ユネスコメンバーは、以前から「千葉地球市民」という言葉が好きで1987年の昔から毎年「千葉地球市民祭り」を開催しておりました。1989年からセントラルプラザや、千葉市民会館小ホールで開催しておりました。07年から市民会館改修工事のため会場に困っていたところ、千葉大学のご好意によりけやき会館で開催させて頂けるようになりました。そして07年3月23日に、晴れてけやき会館のホールをはじめ全館を使わせていただき「千葉地球市民祭り」を開催いたしました。「心の世界を広げよう」をテーマに、各国留学生に各部屋にブースを作って貰い、ステージも各ブースも大盛況、文字通り各国が集



UF交流会でのユネスコパネル展示

まった地球市民祭りとなりました。翌08年にも開催し大成功で、Picasa ウェブにも千葉ユネスコ主催「地球市民祭り・千葉大留学生」と沢山の写真が載っているほどでした。しかしその年の8月から県国際コンベンション等主催のグローバルフェスタがけやき会館で開催されることになり、千葉ユ協は「地球市民祭り」を断念し、それに代わるものとして年2回のUFに参加し、地球市民活動の実践としている次第です。

[K2 岡本博幸 (千葉ユネスコ協会)] 「「知・真・絆」の機会にふれて」

千葉大学UF40回継続おめでとうございます。今後更なる発展を祈念しております。私は、第32回から毎回参加をしております。その都度留学生の真摯な発表・演舞から各国の文化・歴史の理解を深めております。UFは私にとって異文化理解の場であるとともに、人間の生き方・考え方を学ぶ素晴らしい機会です。

第一は、知の広がりへの享受です。各国には素晴らしい歴史と文化があり、それを育み伝えてきた人々の努力、そして継承してきた人々の生き方・考え方を知ることができることです。歴史・文化継承には、破壊・変革・苦難の道のりがあったことを思います。発表から、それらを乗り越えてきた人間の力強さ・素晴らしさを感じることが出来ます。そして、未来に継承していく若者の力を感じます。知の世界が無限に広がっていきます。

第二は、留学生の真摯な態度です。発表者の中には短期留学の方もいます。発表には難しい日本語の理解が必要です。それを乗り越え発表していく態度は感動的です。発表は、相手に伝達し理解してもらわなければなりません。UFはまたとない機会だと思います。理解し合えることは、絆を醸成させることです。自国の文化と共に日本文化との共通性、相違性などを学んでいただき、日本の良さをも理解していただけたら幸いです。

第三は、仲間の絆の素晴らしさです。UFの運営には多くの学生が関わっています。40回には約60名の学生・留学生によって運営されていました。この人たちは、やがて日本や世界のリーダーとなって活躍する時は必ず来るはずで、そのとき再び交流しあい、話し合うことが出来たら最高だと思っています。40回の歴史に関わった後、世界で活躍している方も沢山いるでしょう。その方々がUFに参加し感想を述べる機会があったら素晴らしいのではないのでしょうか。ここに携わった皆さんが今後、絆を大切に大きく羽ばたいてほしいと思っています。

[K3 吉原喜代 (母と学生の会 千葉支部)]

UFが40回を迎えましたことを心からお喜びいたします。振り返ってみますと、第1回(1995年6月)でアメリカのメラニーさんが、アメリカ旅行案内をしてくれたことを懐かしく思い出します。旅にあたっての注意で、彼女が、「現金を持って旅行しないように。必ずトラベラーズチェックにしてください」と何度も言ったことが印象に残っています。17年前のことです。世界中の皆がカードを使用する現在、トラベラーズチェックを持って旅行に出かける人がいるのでしょうか。

私が所属する「母と学生の会」では留学生寮（現国際交流会館）で、四季折々にパーティーを開き、食事を提供しています。20年以上も前は、マヨネーズ、チーズ等を使った西洋の料理は、アジアからの留学生には不評でした。それが現在では当たり前のように喜ばれています。長年留学生との交流の中で、生活様式の違いを「へえ、そうなんだ」と、「こちら側」から「あちら側」と分けて眺めていました。それがいつの間にか、生活様式はボーダーレスになり、今では一つの共同体に住んでいるような気がします。もちろん、その国固有の伝統芸能、芸術のように変わらぬものもあり、その発表は十分に楽しめるものです。しかし、日本の歌舞伎座に将来女優さんが登場することはないでしょうか。

文化は流動的で変化していくものと思われます。留学生の皆さんが育った自国の「今」を的確にとらえ、これをUFで発信してくれば、このフェスティバルは、さらに興味あるものとして、長く続いていくと思います。さらなる発展を期待して、50回、60回達成の日を楽しみにしています。

〔K 4 岩瀬英樹（三井ボランティアネットワーク事業団）〕

UFが開催40回の節目を迎え、その盛況振りに接し大変嬉しく思い、また、指導の先生方、CISGの学生さん、そして各国留学生の皆さんのご努力に敬意を表する次第です。

私が三井V-NETの千葉大部会に参画して10年近くなり、UFにもほとんど顔を出してその都度のアンケートに記入して来ましたので、数々の思い出がありますが、回数を重ねて当初の“学芸会”の域からかなりステップアップして非常に多彩なパフォーマンスが見られるようになったというのが最近の印象です。

一つには、映像技術の発達のお陰で、参加国の豊かな民族文化や自然資産がふんだんに紹介されて印象を明確にした上で、若者達が民族衣装を纏い誇らしげに演ずる生の民族音楽・舞踊の楽しさが加わって、プレゼンテーションに厚みが増して来た事と、続いて、交流会でじかに触れ合う国籍・人種を超えた交歓の輪の広がり、UFに参加した充実感に繋がっているのでしょう。

ただ、以前から気になっているのは、ステージの熱気に反し客席がやや寂しい事でした。40回記念時の様なホットな雰囲気を常に保つべく、留学生はもちろん日本人学生や地域住民へのPR、さらには、他校留学生や各国支援団体（大使館も含め）への協賛参加を呼び掛けるなど、単なる千葉大イベントの域を超えてより広範な国際交流祭りとして発展されん事を、来る50回の節目に向けての期待（夢？）としたいものです。

はるばる千葉へやって来た各国留学生達が、日本（そして千葉）の歴史、文化、自然を新鮮な目で見つめ、自国との比較による発見や批評を忌憚なく披歴し、今後の前向きな国際的交流への橋渡しとなる経験を積んで欲しいと願っています。

〔K 5 井出 袈裟繁（三井ボランティアネットワーク事業団）〕

自分が三井-V n e t 千葉大部会員の仲間入りさせていただいたのは最近ですが、この

UFは既に数回見せていただきました。この集いのために、留学生ならびに千葉大日本人学生がチームワーク良く企画、演出にと活躍されていることを、国際親善の目で楽しく、感激して見せてもらっていましたが、今回はその回数も40回を迎えるということに、心からお喜びを申し上げます。毎回、順番に選ばれた国の留学生と協力する千葉大生は、自国の文化、歴史、そして現況などを限られた時間の中で、如何に旨く紹介するか知恵を絞り、企画し、演出の練習を重ねて努力している姿が読み取れます。今回はとりわけ40回ということで、通常のように選ばれた3カ国の紹介に加えて、特別企画「世界の音楽」ということでプラス4カ国の留学生によるパフォーマンスも加わった。これだけ多くの盛り沢山のプログラムが、果たして時間内に旨く収まって終えることが出来るだろうかと当初気になった。途中、ハプニングや音楽の断絶事故などがあったにも関わらず、最後のパフォーマンスが終了し、気になっていた時計を見て驚いた。2分程度のずれが認められたが、ほぼプログラムどおりではないか？司会者をはじめ裏方のスタッフの時間管理の努力・成果には大きな拍手を送ります。

今回は40回という節目のUFでもあってか、開演にあたっての挨拶には千葉大学長・斉藤康氏自らのスピーチが会場いっぱいに伝わりました。「この千葉大で年々多くの留学生が学び、日本での生活を楽しみ、国際親善に貢献し、世界をより身近に感じ、やがては世界平和に繋がることを願う。このフェスティバルもその中の一つとして40回を迎えたことを喜びとする」といった主旨の挨拶であったように記憶します。同感です。このUFが今後も引き続き発展してゆくよう祈念します。

[K 6 杉山良子 (千葉大学けやき倶楽部 国際理解グループ)]

40回記念おめでとうございます。留学生と日本人学生が協力しながら行われるUFはとても魅力な場として楽しませて頂いています。年々、留学生の日本語能力も向上し、UFの企画も素晴らしくなっている事を実感しています。サポートをなさっていらっしゃる諸先生方のご努力の賜物と思います。

私の留学生との関わりは、けやき倶楽部国際理解グループに入って、年に2回の留学生への日本文化紹介、主に「浴衣の着付け」と「折り紙」をすることがスタートでした。以来、色々な国の留学生との「ふれあい」を楽しんでおります。昔、住んだ国、旅行で行ったことのある国、未知の国の留学生との交流は得難いものです。

また、私は十数年前より、千葉市国際交流協会でボランティアとして日本語を教えています。そこでも、千葉大学の留学生との出会いがあります。彼等の学習能力は高く、文法の呑み込みが早く、さすが千葉大学の留学生と感じますが、私の教えた生徒達は日本語の準備なく研究に来た生徒が多く（大学院、博士課程）初めの数か月は日本語が聞き取れない（hearing）、言いたいことが言えない（speaking）、研究どころではなく落ち込む生徒がかなり多くいました。留学生は少なくとも半年は日本語を勉強してから留学するシステムをとるか、専門に入る前に6か月の日本語研修を義務化の方が良いのではないかと思います。

います。言葉が通じないことによる孤独感や劣等感。そのため研究は辞めて帰国したいと悩む学生がいます。

千葉大学では、ホームビジット、ホームステイをなさっており、それは日本の生活、文化等を知る上でとても良い企画と思います。しかし、残念ながらその日数が余りにも少ないように感じます。夏休み・春休み等長期のお休みに数日間のステイを入れる事は出来ないのでしょうか？ 私は少しでも多くの留学生に日本家庭でのステイを経験して貰えたらと思っています。私自身は日本語の生徒を気楽に家に招待し、普段の日本の生活を味わって貰っています。生徒の帰国後も彼らの家族を含めた交流が続いています。これからも、出来るだけ長く留学生の支援を通じて国際交流に貢献できればと思っています。

〔K 7 豊田 昂（千葉大学けやき倶楽部 国際理解グループ）〕

UFが始まって以来40回の回数を重ね、千葉大学国際教育センターの伝統行事として定着していますが、ここに至るまでに関係された方々の努力がいかに大変だったかを推察し、敬意を表したいと思います。

数年前に実社会を卒業し、千葉大学に活動拠点を置くけやき倶楽部の国際理解グループに参加してはじめてこのような伝統ある行事を知りました。まだUFへの参加は2～3回ですが、千葉大学に留学している学生の方々とは国際理解グループの活動を通じていろいろ接しており、時には千葉大学の構内を歩いていると顔を知った留学生の方に会う事もあります。

交通手段の発展と情報技術の発達によりますますグローバル化していく世界にあって、他の地域の人々の歴史や文化、生活などを知ることは価値観の異なる地域の理解にとって大変重要なことです。近頃はインターネットやマスコミの発達により、世界の国々の文化や生活もかなり紹介されておりますが、UFで直接その紹介を見聞きするという事は、五感で直接感じるという意味で大変有意義だと思います。

私の印象に残っているのはエジプトの紹介で、ピラミッドの前で武士の格好をしている明治維新時の遣欧使節団の集合記念写真を見たことです。遣欧使節団の記録が書かれた書物を調べ、当時できたばかりのスエズ運河を経由して、とにかく世界を知ろうと欧米で堂々と振舞っている維新の人の姿に感心しました。千葉大学で学ぶ留学生に較べると、日本人学生の留学は少ないということを聞くと、明治維新の頃に世界を知ろうという情熱に燃えて海外に出向いた人々を想起し、もっと多くの学生諸君が、海外への留学で多くの友を得、異なる文化・歴史・知識を知って、ますますグローバル化するこれからの時代に大いに活躍してもらいと思います。

今まで接した留学生の中には、祖国に帰ってもいまだに連絡をくれる留学生もおります。「東日本大震災や原発の事故で、千葉は大丈夫でしたか」などという便りをもらおうと、「世界各地にいる多くの留学経験者が日本のことを思ってくれているのだ」と考えられるのは、大変心強いことです。

我々も日本にいながらにして、若い人に祖国のことを直接教えてもらい、文化・歴史を理解することができるUFは、大変興味ある行事です。このフェスティバルが今後も長く続くことを期待しております。

[K 8 泉妻 敦子 (千葉大学けやき倶楽部 国際理解グループ)]

千葉大学UFに初めて参加したのは、十年位前の事だと思います。西千葉にある岡本国際奨学交流財団の交流会で出会った中国人留学生が、UFに出演すると聞き、駆けつけました。留学生が踊りや楽器演奏等を交えた自国紹介をし、楽しませていただきました。交流会でも、出演した留学生との交流、各国の料理試食等で、大変楽しいひと時を過ごさせていただきました。

UFの優れた点は、自国の紹介を希望する留学生が、自由な発想で、ステージを作り上げる事。それを日本人学生が手伝う事。さらに一般人にもお手伝いするチャンスがある事です。多くの方々が参加し、UFを盛り上げていくことは素晴らしい活動だと思います。私は八千代市で日本語のボランティアをしています。一昨年12月のUFで、私の日本語教室に通っていた中国人の生徒と会場で偶然出会い、その年の9月に千葉大大学院に入学出来た事を知り、本当に嬉しく、終了後、近く中華料理店で祝杯をあげました。この様にUFでは色々な方との出会いがあります。

一方、細かいことですが少々気になる点があります。自国紹介後に多くの留学生が「御静聴有難うございました」を結びの言葉として使っていますが、やや固く感じるので「今日のご来場有難うございました」とかの方が、UFの雰囲気にあっているように思います。

40回では女性8人がベトナムのアオザイを着てファッションショーをされましたが、華やかで見応えがありました。時には、自国発表の機会が少ない少人数の国の留学生が、男女ペア（ペアが組めない時は日本人学生が代役する）でコスチュームショーをするのはいかがでしょうか。といっても、正装でなくて良いと思います。普段着でもその国らしい服装や小道具一つ持つだけで良いのです。そして最後にその日の出演者全員がステージに集い、会場の聴衆と一緒に、皆が良く知っている歌、例えば「上を仰向いて歩こう」とか「小さな世界」等を歌うとより盛り上がると思います。

人間は「聴いて」、「見て」、「自分でやった」事の80%を覚えていると言われています。第45回、第50回と毎回進化する新しい試みをしていってほしいと思います。そして「また、行ってみたい」と思える様な企画を期待しております。

[K 9 徳田 収 (袖ヶ浦市国際交流協会)]

千葉大学UF 40回達成、おめでとうございます。見城先生に、開催案内メールを頂き、ほぼ毎回参加致しております。けやき会館で、留学生達が自国の文化などを紹介してくれる度に、少なからず海外文化を理解できた事に喜びを感じています。また、留学生の奮闘

を見るにつけて、日本の学生たちの海外留学が少なくなっている現実を危惧しているのは、私だけでしょうか？

袖ヶ浦市にかつてホームステイした韓国留学生の許君の結婚式に招かれ、2010年の1月に、ホストファミリーの小桜夫婦と仲間達の総勢8名でソウルへ行ってきました。結婚式当日は、千葉大学に留学していたOBたちが、滞在ホテルから、会場まで案内してくれました。会場には、顔見知りの留学生OB達が10名ほど来ており、女医さんのソヨンさんを初め、他の人も韓国を代表する企業に就職し、見るからにバリバリのサラリーマンで頼もしい限りでした。その上、驚いたことに、新婦さんと新婦の母上も千葉大学OGとのことで、これから誕生するベビー達も、きっと千葉大学に留学してくれるのではないかと、ひそかに思ったものです。

これからの世界は、宗教や民族など色々な問題を抱えながらも、グローバル化はますます進むものと思います。日本に留学していた学生たちが国元に帰り、日本の良き理解者として活躍してくれば、民族間の誤解が無くなるのでは、と確信しています。今後とも世界の潮流を直視しつつ、世界に飛躍する人材をたくさん輩出して頂きたく、千葉大学国際教育センターの今後ますますのご発展を期待しています。

〔K10 小桜始子（袖ヶ浦市国際交流協会）〕

私が袖ヶ浦市国際交流協会の会員として初めて千葉大のUFに参加させて頂いたのは、第24回（2004年1月）チリ、タイ、インドネシア、アメリカ、オーストラリアの留学生による文化紹介でした。自国の文化をOHPで紹介、珍しい楽器の演奏、また民族衣装を身につけた踊りや楽しい歌等を披露して頂き、こんな身近な場所で異国の文化に触れられる事に大変感動いたしました。

その後ホームステイの受け入れプログラムに参加する機会を得、我が家で受け入れた留学生の発表を誇らしく思ったり、発表の機会がない時は連絡を取り合い、学内での交流を深めフェスティバルに毎回楽しく参加させて頂きました。

一時期OHPだけの文化紹介で少しマンネリ化した時期もありましたが、今回第40回UFに参加して、学生たちの発表スタイルや内容に変化を見出すことができ、新たな楽しみを得ました。日本で他の留学生がどのように過ごされているか判りませんが、千葉大の留学生は勉強だけではなく自国の紹介できる“場”を得られる事は大変幸せな事だと思います。UFが毎年継続してできるのも見城先生はじめスタッフの方々のお陰と感謝しています。私もこれから、時間の許すかぎりUFに参加して、微力ながら留学生の支援に協力していきたいと思っています。

〔K11 大畑みつ代（袖ヶ浦市国際交流協会）〕

千葉大学のUFに、初めて参加させていただいてから8年になります。子供から手が離れ、何か他のことを、と考えていた時、袖ヶ浦市国際交流協会と出会い、UFを知りまし

た。今まで知らなかった国々の紹介、そして留学生の熱心な発表等、圧倒されるほどでした。中でも印象に残っているのは、韓国留学生の「サムルノリ」でした。その頃私も、袖ヶ浦市国際交流協会で異文化交流部に所属していましたので、どうしても「サムルノリ」を袖ヶ浦市民にも知ってもらいたくて、留学生と何回かのコンタクトをとり、やっとの思いでやっていただくことになりました。決まった時は、本当に嬉しかったです。

袖ヶ浦市での発表では、韓国大使館の協力のもと、楽器や衣装等を用意していただきました。私が感心するのは、その後も留学生達が練習を続け、このサムルノリを引き継ぎ続けていることです。

昨年は、東日本大震災で日本中が悲しい想いをしました。そして「絆」という言葉が日本中を勇気づけました。この言葉のように、U F も、人と人の繋がりを大切にずっと継続されることを願い、U F 40回へのお祝いの言葉といたします。

[K12 高橋孝夫 (千葉明德高等学校 芸術科教諭)]

「学びと生きるがダイレクトに繋がる千葉大学・アジア留学生」

私は千葉市内の私立高校で、総合時間「アジアを学ぶ」という授業を約14年間続けてきました。中国・韓国・インド・ベトナムなどその国の基本的な歴史・文化を学んだ後、実際にゲストとして、千葉大の留学生に来てもらい、色々な話をしてもらいました。またこの授業を縁として、生徒たちを引率し、U F にも何度か参加しております。

授業は、高校生が質問をして、ゲストが答えるという形式で進みます。生徒達の質問は、実にシンプルでストレートです。「なぜ留学先が日本なの?」、「日本語はどこで覚えたの?」、「日本をどう思う?」、「日本のアニメは中国で観ていた?」。

今の高校生の質問を考えると、すべてが日本を軸足に考えた質問が、実は非常に多いのです。あくまで日本がベースなのです。海外を知らない高校生だから当たり前かも知れません。しかし、留学生たちは自分の国と日本を照らし合わせて、日本の良いところ、日本の悪いところ、日本のこれからの未来などを鋭く語ってくれます。その答えが実にマトを得ているのです。

留学生たちは20歳前後に自分の国を出て、日本という異国で学ぶ決心をした学生達です。日本は島国ですから、言葉も違えば、制度も文化も違います。日本では当たり前でも、自分の国ではあり得ないことも、彼らなりに自分で吸収するようなスポンジのような包容力があるのです。これには実は毎回驚いています。

もちろん千葉大の留学生はアジア人に限りませんが、U F で発表するアジアの留学生を観ていると、日本という異国の中で、「学び」と「生きる」ことがダイレクトに繋がりがながら、柔軟に生きていることに感心してしまいます。

[K13 中川雅彦 (千葉県立千葉東高等学校 地歴科教諭)]

辛亥革命百周年を記念し、昨秋「1911」という映画が製作公開された。この辛亥革命に

は、日本で学んでいた中国留学生が多く関わったとされるが、孫文や留学生たちは日本との交流、協力関係の中で、歴史を変えた。

千葉大学と千葉東高校は徒歩10分の近さゆえ、数多くの高大連携プログラムを共有している。日本に居ながらにしてできる国際交流として、UFは貴重な催しである。二十数名の高校1年生を連れて、40回UFも参加させていただいたが、評判は上々であった。

大学時代に国際交流サークルに所属していた私は、これを機に本校においても同好会を立ち上げようと思い、メンバーを募集したところ、16名が集まった。この1月には留学生を本校に招き、授業に参加してもらい、先日はユネスコ協会主催のひな祭りにも招いていただいた。

平成24年度中のユネスコスクール加盟を目指している本校にとって、約千名もいる千葉大学の留学生は大使館員のような大切な存在である。ひな祭りの催しでは、ネパール人留学生から踊りを教わっている本校生徒の映像が、ケーブルテレビで放送された。

アメリカにホームステイに行くことだけが国際交流でないことを、UFを通じて、生徒たちは学んでいる。これからも、この繋がりを拡大していきたい。

